

中部地区英語教育学会

The Chubu English Language Education Society



第 50 回記念愛知大会

大会要項

2021年6月26日(土)・27日(日)

オンライン開催

(実行委員会本部会場「ウィンクあいち」)

【主催】

中部地区英語教育学会

【後援】

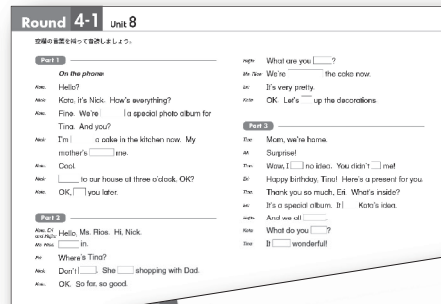
愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県公立小中学校英語教育連絡協議会



Here We Go !

ENGLISH COURSE

令和3年度～6年度 中学校英語
教科書準拠 生徒用教材



ラウンドシステム・ワークブック

ストーリーを生かした指導法「ラウンドシステム」に対応できるワークブック。
自宅学習用の教材としてお使いいただけます！

定価 各 700 円 (税込)



ワークブック

基本から応用まで、
総合的な力が身につくワークブック。
解答例を示した
教師用朱書本もご用意！

定価 各 750 円 (税込)



学習サブノート

授業で学んだことを自由に書き込める
学習ノート。
新出語句の確認や、
板書の整理に役立ちます！

定価 各 500 円 (税込)



基本文型集

教科書に沿った基本文型・文法の例文を、
いつでも使えるポケットサイズに。
赤シート付で、基本から応用文型まで
定着が図れます！

定価 各 550 円 (税込)



リスニング CD

英語耳を育てる、自家用リスニング CD。
ウェブアプリを使って、スマートフォンや
タブレットで再生ができます！

定価 各 2,750 円 (税込)



光村図書

光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎 2-19-9

Tel 03-3493-2111(代表)

www.mitsumura-tosho.co.jp

目 次

会長挨拶 中部地区英語教育学会会長 酒井 英樹	3
実行委員長挨拶 第50回記念愛知大会実行委員長 犬塚 章夫	4
大会日程表・大会プログラム	6
参加にあたってのお願い	10
協賛企業一覧	12
要 旨	
CELES 50周年記念事業	
1. 記念講演	16
2. シンポジウム	18
CELES 2021	
3. 問題別討論会	24
4. 課題別研究プロジェクト報告	26
5. 自由研究発表	30
CELES 役員名簿	67
CELES 2021 実行委員名簿	68

後 援

愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県公立小中学校英語教育連絡協議会

謝 辞

本学会は大幸財団（DAIKO FOUNDATION）の学会等開催助成を受けています。

中部地区英語教育学会

会長挨拶

CELES at Fifty: For Classroom Practitioners and Researchers



SAKAI Hideki (Shinshu University)

President, the Chubu English Language Education Society

It is my great pleasure to welcome you all to this memorable 50th Annual Aichi Conference of the Chubu English Language Education Society (CELES). This conference was supposed to be held in June 2020 on the Nagoya Dome-Mae campus of Meijo University, but it was postponed due to the COVID-19 pandemic. This was a difficult decision considering the extraordinary effort and time the Executive Committee had taken to prepare and the members who were looking forward to sharing their practice and research in Nagoya. One year later, the conference is being held online for the first time in CELES's 50-year history. It is not hard to imagine what the Executive Committee has had to deal with as everything is new. Thanks to their effort, CELES members and other participants can come together, share their knowledge and experience, and discuss English language teaching here today, even online.

The first CELES conference was held in July 1971, and we are celebrating CELES's 50th anniversary at this Aichi Conference. Throughout its long history, practitioners and researchers have both tackled challenges and tried to find solutions to the problems concerning English language teaching. Inheriting this good tradition, I intend to put every effort into making CELES a more attractive platform through which practitioners and researchers will share information, opinions, expertise, and experience and work together laterally to better understand English education, solve a pile of practical problems, and advance theoretical knowledge.

To commemorate the 50th anniversary, we present a special lecture by Dr. Rod Ellis and a special symposium. Dr. Ellis will give a lecture on task-based language instruction. The theme of the symposium is "Looking back on half a century of English education and thinking about its future." I believe that the lecture and symposium will be a good opportunity to think about how theory and practice can be connected and what society needs to deliberate on in opening the door for the next half-century.

Lastly, I would like to extend my sincere gratitude to the members of the Executive Committee for the Aichi Conference and all the presenters and participants. I also wish to express special thanks to the Aichi Prefectural Board of Education, Nagoya City Board of Education, and Liaison Council of All Aichi English Education Committee in Elementary and Junior High Schools for their support in making this conference a success.

CELES2021 実行委員長挨拶

ようこそ学会初めてのオンライン大会へ



中部地区英語教育学会第 50 回記念愛知大会

実行委員長 犬塚 章夫

皆様、ようこそ中部地区英語教育学会第 50 回記念愛知大会にお越しいただきました。実行委員を代表して心から歓迎いたします。と、書き出しましたが、愛知大会はオンライン開催となりましたので、愛知の地で参加の皆様を歓迎することはできません。しかしながらすべての参加の皆様の参加（自宅からの接続）を心から歓迎いたします。昨年度開催であった第 50 回愛知大会は、コロナ感染予防のため 1 年間延期となりました。本年度もまだまだコロナ感染予防の必要性は継続しており、対面での学会開催が難しい状態にあります。今回は、学会 50 周年を祝う記念大会であり、本年度は是非とも開催したいという思いから学会初のオンラインでの開催に踏み切ることとなりました。

学会 50 周年を祝う大会として、「第 50 回大会記念講演」と「第 50 回大会記念シンポジウム」を企画しました。記念講演では、英語教育界で最も著名な研究者の一人、Rod Ellis 氏をお迎えしました。本来であれば、講演以外でも Ellis 氏と親しく交流する機会があるはずでしたが、オンラインでありますので、それは叶いません。今、氏が考える最新の情報をうかがいたいと思います。記念シンポジウムでは、「英語教育の半世紀を振り返りこれからの英語教育を考える」をテーマとして本学会を引っ張っていただいた歴代の先生方に討論をいただきます。

問題別討論会と課題別研究プロジェクト、自由研究発表は従来通り行いますが、オンライン大会であることから、英語教育実践セミナー・英語教育研究法セミナー・パネルディスカッション、さらには懇親会も、今回実施を見送らせていただきました。初めてのオンライン大会ということもあり、専門業者の協力を得て大会を運営させていただいています。Zoom（ウェビナー）の仕組みでは、聴衆の顔が見えないことや、当日の資料配付ができないことなどご不便をおかけしますが、遠方からでも時間的・距離的負担なく参加できる利点もありますので、せっかくの機会ととらえ、多くの先生方の研究の交流ができればと願っています。

なお、協賛企業様にもオンライン大会で企業ブースが出せない中、通常通り広告や Zoom を使った展示として協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。参加の皆様も、是非オンライン企業ブースにもお立ち寄りください。

最後になりましたが、参加していただいている先生方、研究発表をしていただく先生方、さらには司会をお勤めいただく先生方、オンライン大会で例年の学会とは何かと雰囲気は違いますが、ご協力いただき、みんなでこのオンライン大会を成功に導きましょう。実行委員一同、画面の裏で最大限のサポートをさせていただきます。

祝 中部地区英語教育学会 第50回記念愛知大会

魔法の
アルファベット
練習ノート 5・6

NEW HORIZON Elementary
English Course 5・6 準拠



A4判/4色刷/各48頁
定価 各290円(本体各264円)

小学校の文字指導は
この2冊でばっちり!

アルファベット → 単語 → 文の
スモールステップで確かな力を育てます。

充実のQRコード
コンテンツを収録した
新時代のペンマンシップ



スマホや
パソコンで
使える!



教科書では
狭いスペースで
扱っていた内容を
ゆったりした紙面で
くり返し練習
できます。

NEW HORIZON
Elementary 6
p.90
Sounds and Letters

本書6年 pp.4-5文字の音

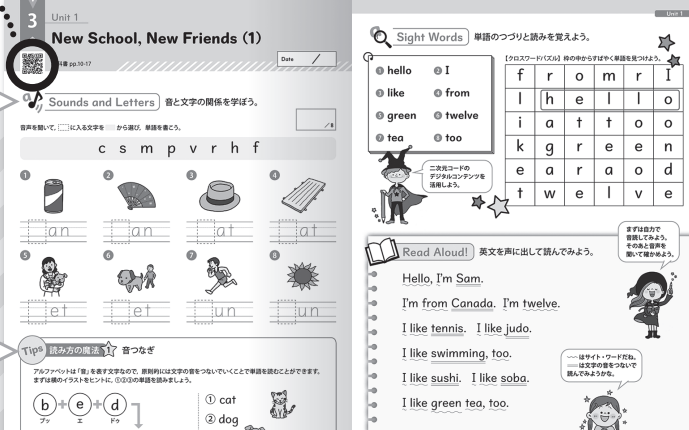
魔法の NEW HORIZON
English Course に完全準拠!
読み書きワーク 1~3

3学年合計
約80箇所

各紙面のQRコードから、デジタルコンテンツにアクセスし、
音声や映像を使って学習できます。

小学校でも学習した
音と文字の関係を
をふり返ります。

英語を読むために
必要な知識を
読み方のコツ=「魔法」
として解説。



A4判/4色刷/各48頁
定価 各290円(本体各264円)

★デジタルコンテンツ付き

スローラーナーでも
教科書の本文を
自力で読む力を育成
することができます。

◀1年 pp.6-7

※「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録商標です。



義務教育部 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7490
中部支社 〒461-0004 名古屋市東区葵3-15-31 千種ニュータービル Tel:052-939-2722 Fax:052-939-2720
ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp>

大会日程表・大会プログラム

第1日 6月26日(土)

	第1室	
9:30 10:10	総会	
10:15 10:35	開会行事	
10:40 12:20	<p>第50回大会記念講演</p> <p>(講師紹介) 田中武夫</p> <p>Dr. Rod Ellis</p> <p><i>Task-based Language Teaching Using Input-based Tasks</i></p>	
	<p>昼食</p> <p>協賛企業プレゼン</p>	
	第1室	第2室
13:10 15:10	<p>問題別討論会(1)</p> <p>「国際共通語としての英語」から考える英語科教育</p> <p>柴田美紀・仲潔・藤原康弘</p>	<p>問題別討論会(2)</p> <p>「英語を話せるようになりたい」に学校教育は応えられるか？—小・中学校でできること</p> <p>犬塚章夫・金沢優・山本純一・加藤拓由</p> <p>【SNS 発信不可】</p>
	協賛企業プレゼン	
	第1室	
15:30 17:30	<p>第50回大会記念シンポジウム</p> <p>英語教育の半世紀を振り返りこれからの英語教育を考える</p> <p>(司会) 大下邦幸, 紺渡弘幸</p> <p>青木昭六「マクロの視点からの英語教育」</p> <p>江利川春雄「日本における英語教育学と英語教育研究組織の成立史」</p> <p>白畑知彦「最新の教授法研究等—文法項目別・習熟度別指導法の提案」</p> <p>田中武夫「実践研究における課題について」</p>	

大会日程

第2日 6月27日(日)

		第1室	第2室	第3室	第4室	第5室	第6室
		[司会] 階戸陽太	[司会] 和田順一	[司会] 中川右也	[司会] 浦野研	[司会] 巽徹	
	9:20	司会者・発表者打ち合わせ(各発表室)					
発表 1	9:30 10:00	渡邊政寿・大場浩正 初等教育教員養成課程の大学生が持つ外国語活動・外国語への意識と課題 【SNS 発信不可】	野口育美 概要を捉える力を高めるための聞くことの指導—中学校2年生の実践事例 【SNS 発信不可】	宮崎直哉 基礎・基本の難しさ—中学3年生のbe動詞の学び直しを通して	染谷藤重 教師の動機づけスタイルがエンゲージメントに及ぼす影響—英語授業における心理的欲求を媒介として 【SNS 発信不可】	Jarrell, D. Five Ways to Integrate an Email Magazine into Everyday Teaching	課題別研究プロジェクト(1) CLIL とアクティブラーニングによる外国語教育の可能性 【SNS 発信不可】 1. 古家貴雄・太田圭 公立小学校におけるCLIL 活動実践報告—外国語科と社会科との統合を通して 2. 山本孝次 持続可能な社会の創り手育成を目指したSoft CLIL の授業実践 3. 村上裕美 大学における映像への英文解説文作成を通じた総合学習 4. 安達理恵 CLIL とラップブック指導による小学校外国語指導法授業の学生への影響
発表 2	10:10 10:40	稲葉みどり 初等英語教育の授業実践に対する英語を専科としない学部生の意識—学習内容、教室活動、指導法等をめぐって 【SNS 発信不可】	吉崎理香・岡崎浩幸 中学3年生のやり取りにおける意見の再構成に関する実践研究	島田勝正 認知文法を援用した意識化タスク 【SNS 発信不可】	石田正寿 コーチングと自己調整学習の理論に基づくモチベーションの途切れない授業デザイン	杉本健 英語表現Iにおける自己表現活動の時間確保と指導方法について(実践報告)	
発表 3	10:50 11:20	宮腰宏美・竹内美都 教育職・保育職を目指す学生の英語絵本の読み聞かせ活動を通じた英語への自信の変化について 【SNS 発信不可】	田中知聡 高等学校の英語授業における「話すこと(やり取り)」の授業改善の効果について 【SNS 発信不可】	川村拓也 高校英語授業における翻訳行為とそのメタ的意味付けの実践報告	田所貴大 『中部地区英語教育学会紀要』における質的研究の報告基準に関する検討 【SNS 発信不可】	中田葉月 ICT 機器活用による児童の文構造への気づき	
発表 4	11:30 12:00	中野聡 新学習指導要領移行期における小学校外国語活動・外国語科の取組—英語教育課程検討委員会の取組を通じて	藤知英 ノート・プレゼンテーションにおけるライティングおよびスピーキング指導とそのCAF 分析 【SNS 発信不可】	岡田美穂子 日本人高校生による自動詞の過度受動化—態判断課題を用いて 【SNS 発信不可】	寺沢拓敬 ウェブ調査をはじめとした非確率標本の補正—英語教育における意識調査・実態調査への応用		
		昼食 協賛企業プレゼン					

		第1室	第2室	第3室	第4室	第5室	第6室
		[司会] 伊達正起	[司会] 柳善和	[司会] 吉田三郎	[司会] 藤田賢	[司会] 永倉由里	
	12:40	司会者・発表者打ち合わせ（各発表室）					
発表 5	12:50 13:20	田中武夫 英語授業での発問を学ぶ大学教職科目における学生の認識と学びの変容について	川村一代・岡井崇 指導と評価の一体化を図る小学校外国語科授業実践―「逆向き設計」論を活用して 【SNS 発信不可】	高畑伸子 日米の中高生間の海外交流経験の学習を通して育む言語意識―母語と目標言語のレターのやりとりから	伊東哲 日本人英語学習者の意見文に対する文章観とその形成過程 【SNS 発信不可】	市川裕理 ランゲージングにおける「協働的足場かけ」の研究	課題別研究プロジェクト (2) Thinking About Effective and Motivating Teaching in a Japanese EFL Environment 1. Sato, R. Thinking About Effective Grammar Teaching That Can Improve Students' Willingness to Communicate (WTC) 2. Kasahara, K. Vocabulary Instruction with Distributed Learning and Testing Effect
発表 6	13:30 14:00	階戸陽太 Zoom を活用した英語科教育法での授業観察の可能性 【SNS 発信不可】	巽徹・杉山由季乃・大澤優衣 児童の英単語認識に関する研究 【SNS 発信不可】	藤原剛 真に目指すべき All English の授業―ボトムアップ処理再考	林みどり 大学生日本語母語話者による英文エッセー前方照応の問題点	千田誠二 大学英語系学科ゼミ生の学習状況の分析と課題―正統的周辺参加論を枠組みとして 【SNS 発信不可】	3. Tomita, F. Commas Save Lives 4. Takano, H. Activities That Can Improve Students' WTC 5. Konno, K. & Koga, I. Fostering WTC in the Classroom
発表 7	14:10 14:40	宮川友梨 教職大学院生による英語科と国語科の連携を目指した中学校英語の授業づくりの実践報告	江口朗子 小学生の英語文構造に関するメタ言語知識の発達―縦断的調査から見えること 【SNS 発信不可】	杉山友希 中学校英語教科書にみられる人種・民族の多様性はどのように変化したか―2016年度版と2021年度版の比較 【SNS 発信不可】	今村一博 リーディング中の注視回数と長さ―習熟度による違いが見られるか 【SNS 発信不可】	山本裕也 批判的思考力を高める活動を中心にした英語授業が生徒に与える影響	
発表 8	14:50 15:20	矢野司 英語教育を柱とした地域における協働	米崎里・松岡達也・米崎啓和 小学校英語授業におけるリテリングの活用と効果 【SNS 発信不可】	折橋晃美 検定教科書における言語活動の分析―Bloom's Taxonomy を指標にして 【SNS 発信不可】	花木征哉 スキーマを活用した reading 授業における意識調査と能力の変化 【SNS 発信不可】		
協賛企業プレゼン							

		第1室	第2室	第3室	第4室	第5室	第6室	
		[司会] 岡崎浩幸	[司会] 安達理恵	[司会] 堀田誠	[司会] 川村一代			
	15:30	司会者・発表者打ち合わせ（各発表室）						
発表 9	15:40 16:10	永倉由里・ 藤田卓郎・南侑樹 実践共有コミュニティに関する調査から読み取れる英語教育の現状とニーズ【SNS 発信不可】	伊藤由紀子 世界のお米を知ろう！"Rice de Nice"—小・中学校における英語の音声・文字指導のICT教材開発の取組み	南部匡彦 CEFR-J Word List B1, B2 レベル掲載語彙の意味領域による分析	高橋美由紀・柳善和 小学校外国語科における「読むこと」「書くこと」の「思考力・判断力・表現力等」の指導と評価—デジタル教科書教材を活用して		課題別研究プロジェクト（3） 言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開 [司会] 中川右也 1. 大瀧綾乃 否定証拠中心の明示的文法指導の効果—英語の自動詞に焦点を当てて 2. 柏木賀津子 内容（英文学の活用）と切り離さない文法指導 3. 近藤泰城・中川右也 アニメーションを用いた現在完了の指導法	
発表 10	16:20 16:50	藤田賢 英語専攻の日本人大学生にとっての理想の英語教師【SNS 発信不可】	常名剛司 CLIL で繋ぐ小学校外国語教育と防災教育の統合実践	田中裕実 nursery rhymes の使用に関する一考察—発音への気づきを促す Google 翻訳アプリを活用して【SNS 発信不可】	Qiu, X-S. & Maki, H. The Minimal English Test 60 (MET 60) for Chinese Learners of English: A Study in Sichuan and Shaanxi Provinces of China			
発表 11	17:00 17:30	田村岳充 教科としての英語の「評価」における小学校教員の意識調査	小澤淑子 医療専門職に焦点を当てた ESP 教材の研究【SNS 発信不可】	Yamamura, H. Interactive Use of the Target Language and Its Effect on Learners' Understanding of New Words【SNS 発信不可】	酒井英樹 小学校英語教育に関する科学的根拠生成のためのアウトカム指標の検討—「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てて			
	17:35	閉会行事						

参加にあたってのお願い

ウェビナー接続

- 参加者、発表者、司会者それぞれにおいて接続方法や付随する技術的な事項については、大会ウェブ・サイト上のマニュアルを参照してください。大会当日、参加にあたって万一問題が発生した場合は下記リンクからお問合わせください。大会サポートを委託している（株）VERSION2 より可能なかぎり速やかに回答を差し上げます。

<https://www.celes.info/aichi2020/support/>

全セッション共通

- 講演、シンポジウムを含むすべてのイベントで、録音・録画、PC 画面のスクリーン・ショット撮影は禁止です。
- 【SNS 発信不可】と明記されているセッションについては、発表者からの要請により Twitter 等のソーシャルメディアを利用した「実況中継」やメモ書き、意見交換等を不可とします。

問題別討論会（26日）、シンポジウム（26日）、課題別研究プロジェクト報告（27日）

- 発表者・パネリストはそれぞれのセッション開始 10 分前には発表室に「入室」のうえ、必要な打ち合わせを行ってください。
- 「課題別研究プロジェクト報告」は、本年度は 110 分の時間設定となっています。

自由研究発表（27日）

- 司会者と発表者はご自身が属する発表ブロックの前の「司会者・発表者打ち合わせ」に必ず参加し、発表方法などの打ち合わせを行ってください。「発表1~4」の打ち合わせは 9:20 から、「発表 5~8」は 12:40 から、「発表 9~11」は 15:30 からです。
- 発表時間は 20 分です。その後に 10 分間の質疑応答時間を設けています。

紀要投稿

- シンポジウム、問題別討論会、課題研究プロジェクト報告、自由研究発表の発表者。
パネリストには中部地区英語教育学会『紀要51』への投稿資格が与えられます。投稿に関する詳細は、中部地区英語教育学会のウェブ・サイトにある「紀要投稿規定・執筆要領」でご確認ください（今後更新予定）。

協賛企業企画

- 26、27日の昼食時、および27日午後の休憩時間中に協賛企業のプレゼンテーションが行われます。Zoom Roomへのリンクなどは大会ウェブ・サイトでご案内しています。。

大会に関するお問い合わせはメールで、以下のアドレス宛てにお願いします。

事務局： celes50th2020@gmail.com

 成美堂 2021 年度 新刊のご案内		〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490	
Live Escalate Book 1: Base Camp.....	2,500 円(税別)	Healthy Habits for a Better Life	1,900 円(税別)
Live Escalate Book 2: Trekking	2,500 円(税別)	CBS NewsBreak 5.....	2,400 円(税別)
Success with Reading Book 3 -Boost Your Reading Skills-	2,500 円(税別)	AFP SciTech Futures.....	2,500 円(税別)
Listen Up, Talk Back Book 2 -English for Everyday Communication-.....	2,300 円(税別)	BEST PRACTICE FOR THE TOEIC® L&R TEST -BASIC- ..	2,200 円(税別)
Global Issues -An Introduction to Discussion Skills-	2,200 円(税別)	PROGRESSIVE STRATEGY FOR THE TOEIC® L&R TEST ...	2,000 円(税別)
Let's Read Aloud & Learn English: Going Abroad ...	2,200 円(税別)	Grand Tour – Seeing the World	1,900 円(税別)
Living Grammar -New Edition-.....	1,900 円(税別)	Meet the World 2021 -English through Newspapers-	2,000 円(税別)
Science Arena	1,900 円(税別)	Medical World Walkabout.....	2,500 円(税別)
		 SEIBIDO	URL: http://www.seibido.co.jp e-mail: seibido@seibido.co.jp

協賛企業一覧

Zoom Room へのリンクはウェブ・サイトでご確認ください。

松柏社 [企業プレゼン]

昨年リニューアルの弊社ホームページのご案内、オンライン授業に利用可能なコンテンツのご紹介を中心に、教科書／研究書新刊、好評既刊のご案内もいたします。先生方のご要望、ご質問もお伺いできれば幸いです。宜しくお願い致します。

東京書籍 [企業プレゼン 広告 p.5]

昨今の教育現場の ICT 化の進展には目を見張るものがありますが、弊社においても、各教科の指導者用デジタル教科書など様々な教育ソフトをご用意しております。中でも、英語については、紙の指導書のセットに指導用デジタル教科書を同梱したものをご用意しております。本日は弊社の Zoom Room では、本年度全面改訂した中学校英語指導者用デジタル教科書のご紹介を行います。お気軽にお立ち寄りくださいませ。

光村図書 [広告 p.1]

皆さま大変お世話になっております。

光村図書は小中学校の英語教科書を発行している会社です。

大修館書店 [企業CM]

特定非営利活動法人 英語運用能力評価協会 ELPA [広告 p.14]

英語運用能力評価協会（ELPA）は、「わが国の学校における英語教育の成果を客観的に調査・評価するテストを実施し、実践的で効率的な学習指導の提言を行う」ため、2003年4月15日に東京都知事の認証を得て設立された特定非営利活動法人（NPO）です。

成美堂 [広告 p.11]

成美堂 2021 年度新刊テキストは、オンライン資料、動画配信、e-Learning など、オンライン授業対応のものが充実しております。ホームページにはテキスト紹介動画もございますので、ご覧ください。見本のお申込みをぜひよろしくお願いいたします。

三省堂 [広告 p.14]

新興出版社啓林館 [企業プレゼン 広告 p.22]

株式会社 新興出版社啓林館です。この度の企業プレゼンでは、
小中学校の先生方に向けて『情報配信サービス』
高等学校の先生方に向けて『オンライン英語 動画・添削教材』
の紹介を中心に行います。参加いただければ幸いです。

浜島書店 [広告 p.67]

浜島書店は学校向け図書教材を出版しております。
中学英語教材は、新課程に対応して全面改訂をしました。

英語 4 技能テスト E-Vision モニター受験募集

ELPA Association for English Language Proficiency Assessment

ELPA から 2022 年発売予定の「英語 4 技能テスト E-Vision」では、「ライティング、スピーキング、リスニング、リーディング」の 4 技能の力をウェブサイト上のテストでコンピュータ、タブレット、スマートフォンにより測ることができ、「主体的・能動的な学習」が必要となる、総合的な英語力がどの程度身についているかを把握することができます。特に大学入学前の英語のクラス分けテストでご利用いただく際にも集団受験の必要がなく、感染症予防の観点からも安心して受験していただけます。また入学前でまだ学生の手元にコンピュータが用意できていないという場合にも手持ちのタブレット、スマートフォンで受験可能です。

「英語 4 技能テスト E-Vision」のモニターテストを実施していただける学校を 2021 年 6 月下旬から募集します。

■英語 4 技能テスト E-Vision 問題概要■

◇仕様：コンピュータ、タブレット、スマートフォンを使用したウェブサイト上の個別受験型テスト	＜内容＞
◇出題レベル：高校英語総合レベル	1：ライティングテスト（文再現・整序）
◇試験時間：リスニング＋リーディング約 50 分	2：スピーキングテスト（文再現・整序）
ライティング＋スピーキング約 20 分	3：リスニング（多肢選択）
	4：リーディング（多肢選択）

■実施概要■

- ・受験料：無料
 - ・時期：2021 年 7 月から 10 月まで
 - ・対象：高等学校／高等専門学校／短期大学・大学 等
 - ・人数：40 名以上
 - ・テスト終了後、引き続きアンケートに答えていただきます。所要時間は約 10 分です。
 - ・受験者名簿を事前にデータでいただきます。
 - ・採点データは、モニターテスト実施後 2 週間程度でお届けします。なお、詳細なスコアレポート等は提供いたしません。
- ※個人情報、テストの解答およびアンケートのデータに関しては、調査・研究及びデータ分析の目的以外には一切使用いたしません。

お申し込み・お問い合わせは：特定非営利活動法人 英語運用能力評価協会（ELPA <エルパ>）

〒162-0806 東京都新宿区榎町 39-3 神楽坂法曹ビル 501 Tel.03-3528-9891（平日 9:00～17:00）Fax.03-3528-9892

e-mail: elpa@english-assessment.org URL: http://elpa.or.jp/

小学校外国語活動向け デジタル教材

＼チャンツとチャンクで身につく！

おとかん
音感 キッズクラウン
場面で話せる英単語 Part 1
下 薫(マジカルキッズ英語研究所) 三省堂編修所 編

短い時間で、聞いて/覚えて/話せる！
新しいコンセプトの英単語学習教材！

販売価格

校内フリーライセンス：41,800円(税込)
校内年間ライセンス：11,000円(税込)
シングルライセンス：4,950円(税込)
※Win版とiPad版は別商品となります。

動作環境

Windows7/8.1/10
iPad(第5世代以降)、iPad Air2、
iPad Pro ※iOS10以上
端末の空き容量は1GB程度ご利用ください。

収録カテゴリを2つ試すことができます！

まずは**体験版**を
お試ください!!

QRコード
からも
アクセス
できます!!



体験版お申し込みサイト <https://tb.sanseido-publ.co.jp/otokan/>

中学・高校

英語ディベート 入門

河野 周 [著]

A5判 208頁 2,420円(税込)
ISBN 978-4-385-36148-2

中学・高校

英語ディベート 入門

英語教員のための
英語ディベート指導ハンドブック



河野 周
英語運用能力評価協会 英語運用能力評価センター
三省堂
ISBN 978-4-385-36148-2
定価 2,420円(税込)
英語教員のための英語ディベート指導ハンドブック

英語ディベートは、
スピーキングをはじめ
「4技能5領域」を
総合的に伸ばす活動として
学校現場で注目を集めている。
本書では中学・高校の授
業や部活動における
効果的な導入方法や
留意点を具体的に説明する。

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411〈編集〉・9412〈営業〉

<https://www.sanseido.co.jp/> ※表示価格は税込価格

辞書は
三省堂

CELES 50 周年記念事業

発表要旨

第1日目

6月26日(土)

1. 記念講演

10:40 ~ 12:20 (第1室)

2. シンポジウム

15:30 ~ 17:30 (第1室)

1. 第 50 回大会記念講演 (6 月 26 日 10:40~12:20 第 1 室)

Memorial Lecture at the 50th Anniversary CELES Conference

Saturday 26 June 2021



Dr. Rod Ellis
Curtin University (Perth, Australia)

Task-based Language Teaching Using Input-based Tasks

Key words:

Task-based language teaching, beginner learners, input-based tasks, design and implementation

Abstract:

In this talk I will discuss how task-based language teaching (TBLT) can work with beginner-level learners using input-based tasks. I begin by explaining what a 'task' is. I address a common critique of TBLT, namely that learners need to be taught some language before they can perform tasks, by arguing that input-based tasks make TBLT possible with beginner-level learners and that such an approach is entirely compatible with what research has shown about the early stages of L2 acquisition. I then briefly consider two studies of school learners and show that input-based tasks can be implemented effectively in Japanese classrooms, are motivating, and can facilitate language acquisition.

The main part of my talk looks at the key features in the design and implementation of tasks. Designing input-based tasks involves considering the choice of topic, the non-verbal devices that are central to the tasks, the pre-selection of target language, the verbal input for the task, and the task outcomes. Implementation options include task preparation, use of the learners' first language, input modification and elaboration, focus-on-form and feedback, and task repetition. I will illustrate these features in actual tasks and in the interactions that result from performing them.

Biography:

Rod Ellis is currently a Research Professor in the School of Education, Curtin University in Perth Australia. He is also a visiting professor at Shanghai International Studies University as part of China's Chang Jiang Scholars Program and an Emeritus Professor of the University of Auckland. He is a fellow of the Royal Society of New Zealand. His published work includes articles and books on second language acquisition, language teaching and teacher education. His two latest books are *Reflections on Task-based Language Teaching* (Multilingual Matters, 2018) and the co-authored *Task-based Language Teaching: Theory and Practice* (Cambridge University Press, 2020) Other major publications include *Language Teaching Research and Language Pedagogy* in 2012, (Wiley-Blackwell), (with Natsuko Shintani) *Exploring Language Pedagogy and Second Language Acquisition Research* in 2014 (Routledge)

and *Understanding Second Language Acquisition 2nd Edition* in 2015 (Oxford University Press). He has also published several English language textbooks, including *Impact Grammar* (Pearson: Longman). He is the recipient of a number of prestigious awards – The British Association of Applied Linguistics best book award (1986), the Duke of Edinburgh best book award (1995), and the Modern Language Association of the United States best book award (1988). He has held university positions in six different countries and has also conducted numerous consultancies and seminars throughout the world.

Other Selected Publications:

- 1984 *Classroom Second Language Development*. Pergamon.
- 1985 *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 1987 *Second Language Acquisition in Context* (ed.). Prentice Hall.
- 1990 *Instructed Second Language Acquisition*. Blackwell.
- 1992 *Second Language Acquisition and Language Pedagogy* (ed.). Multilingual Matters.
- 1994 *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 1997 *Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 1997 *SLA Research and Language Teaching*. Oxford University Press.
- 1999 *Learning a Second Language through Interaction*. John Benjamins.
- 2003 *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford University Press.
- 2005 *Planning and Task Performance in a Second Language*. John Benjamins.
- 2005 *Analyzing Learner Language*. Oxford University Press.
- 2008 *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.). Oxford University Press.
- 2009 *Implicit and Explicit Knowledge in Second Language Learning, Testing and Teaching*. Multilingual Matters.

2. 第 50 回大会記念シンポジウム

(6月26日 15:30~17:30 第1室)

シンポジウムにつきましては、時間の都合により質疑応答は行いません。

【テーマ】英語教育の半世紀を振り返りこれからの英語教育を考える

- 司会者： 大下 邦幸（福井大学名誉教授）
 紺渡 弘幸（仁愛大学）
- 発表者： 青木 昭六（兵庫教育大学名誉教授）
 江利川 春雄（和歌山大学）
 白畑 知彦（静岡大学）
 田中 武夫（山梨大学）

【趣旨】

1971年に設立された中部地区英語教育学会の50回大会を記念して行うこのシンポジウムでは、英語教育の半世紀を振り返り、今後の英語教育が進むべき方向を取り上げて検討する。本テーマに関して、中部地区英語教育学会の中心で活躍されてきた4人の方々に、マクロの視点からの英語教育、日本における英語教育の変遷、最新の教授法研究、実践研究からの課題の視点からそれぞれ発表していただき、これからの英語教育について参加者の方々とともに考えてみたい。

「マクロの視点からの英語教育」

青木 昭六（兵庫教育大学名誉教授）

はじめに：未来は、過去・現在を基盤にして成立する。然らば、英語教育の持続可能な開発目標(SDGs)は如何にあるべきか。

- 1) active learning の基底にあるコミュニケーション能力は、概念形成(learning)と対人的伝達(use)を結ぶ発達途上の能力(learning to use)である。'learn to do' とは、`gradually become able to do something, or accept something, especially by changing one's attitude.(COBUILD)である。gradually, do, accept, attitude の含意を具現すべく、潜在的言語能力(capacity)の適切な顕在的言語能力(competence)化に根気よく取り組む過程で、認知活動と対話活動が、'share'という特色により、合体し、共感性を育む事を明かにする。
- 2) Vygotsky の言語観に則り、発信者としては、受信者の認知的欲求に応じられるよう、伝達内容を整理する共感的思考力や論理的構想力が、一方、受信者としては、発信者の表現の表意に止まらず、発話意図として潜在する真意を帰納的にあるいは発見的に推論する能力が必要であることを明かにする。

3) Widdowson の make sense vs. make meaning と communicative competence vs. communicative capacity という二組の対比の意義を認識し、意味の潜在性を活用することは、創造的言語活動が言語生活を豊かにし、ことばは生きていますと実感することに繋がることについて述べる。

4) 文章を論理的に捉える解釈力が脆弱であるという負の課題の改善に対して不可欠な、論理的把握と語用論的真義の解釈を重視する言語教育に対処する SDG はどうあるべきかについて所信を述べる。

まとめ：ことばは生き物である。その意（ココロ）を探訪する推論の旅路で、分け入るほどに啓かれていく

新世界での心を揺さぶられる出逢いを、学習者と共に、享受する英語教育をマクロ的展望の視点としたい。

「日本における英語教育学と英語教育研究組織の成立史」

江利川 春雄（和歌山大学）

本学会創立 50 周年を記念し、先人たちの苦闘の歩みから今日的な示唆を得るために、明治以降の英語教育学および英語教育研究組織・学会の成立史に焦点をあてて報告する。

明治前期の実学としての英学の時代を終え、後期から教科目としての英語教育の時代に入る。しかし、日本の英語アカデミズムは長らく英文学や英語学が中心で、英語教育は学問的大系を持たない現場の「英語教授法」と見なされてきた。その打開に寄与した最初の体系的著作が岡倉由三郎の『英語教育』（1911）だった。

1920～30 年代には英語教育の学問的確立に向けた胎動がはじまる。H. E. Palmer 率いる英語教授研究所の設立（1923）と英語教授研究大会の開催、研究社「英語教育叢書」全 31 巻（1935～1938）、広島文理大の雑誌『英語教育』の創刊（1936）、三省堂『英語教育研究』全 5 巻（1937）などがその指標である。1935 年に広島高等師範学校の定宗数松は「英語教師の研究団体を作れ」と訴えている。

戦後、新制中学・高校の発足によって英語学習人口が急増すると、各地で英語教育研究会が組織され、1950 年に全英連が発足した。1952 年に文部省は「教育指導者講習（IFEL）英語科教育」を実施し、1955 年以降は教員養成学部教官研究集会外国語部会が開催された。それらの研究集録は、日教組全国教研の報告集とともに、英語科教育法および英語教育学の確立の基礎となった。一連の蓄積と研究を集大成して、『英語教育学への提案』（1968）、『英語教育学の輪郭』（1972）、『英語科教育の研究』（1975）、『英語教育学研究ハンドブック』（1979）などが生まれた。1970 年代前半には地区ブロックごとの英語教育学会が設立され、それらを構成母体とする全国英語教育学会が 1975 年に発足した。

以上の足跡を振り返り、英語教育学と学会の存在意義と諸課題を考えていきたい。

「最新の教授法研究等—文法項目別・習熟度別指導法の提案」

白畑 知彦（静岡大学）

日本の小学校、中学校、高等学校、高専・大学等での、効率的、能率的な英語教育を考える際に、その教え方は、以下で示す日本の学校教育での学習条件下に合ったものでなければ、その指導法が理論的にどのように素晴らしい方法であっても、それは絵に描いた餅となる。

- (1)a. 教室で教科書を使用し、教師に習いながら英語を勉強する
- b. その教師は英語の非母語話者である場合が大半である
 - c. 学校での授業時間数は限られている
 - d. 教室には比較的大勢の学習者がおり、一対一で教えてもらえるチャンスは少ない
 - e. 同一の教室にいる学習者間であっても習熟度の違いが顕著な場合が多々ある
 - f. 中、高校の場合、新たな文法項目を次々に習わなければならない

このような学習条件を念頭に入れた上で、最善の方法を模索して行かなければならない。

本発表では、上記のような学習条件を持つ日本の学校教育の中で、「タスク中心の教え方」が果たして可能だろうか、フォーカス・オン・フォームで使用すべきとされるリキャスティングなどが実践できるのだろうかをまず議論し（私の結論は、両方とも実施するのは難しいとなる）、その後、PPPを基盤とした教え方や、文法項目別に異なる教え方を採用する方法などについて考察を加えたい。

重要なことは、中学生、高校生、大学生など、学習者の英語の習熟度や認知レベルに合わせて、徐々にどれほど「深く」文法規則を教えていくか、または習っていくかである。この意味において、筆者は佐藤臨太郎氏達が訴えている「PPPを主体とする授業構成の主張」に賛成である。PPPを土台とした授業構成の中にコミュニケーション育成につながるタスクを取り入れることは可能であるし、既にそのような実践をなさっている先生方は数多くいらっしゃると思う。明示的知識は明示的知識のままであって、それを自動化された知識（つまり習得）に変化するよう指導すべきであるが、そうしたからといって暗示的知識は変化しないし、変化する必要もない。そして、明示的知識を持っていても学習者は何ら困ることはないからである。

「実践研究における課題について」

田中 武夫（山梨大学）

実践研究とは、日々の実践について教師が主体となって行う探究である。研究結果の一般化を求める実証研究とは異なり、実践研究の主な目的は、教師自身による実践理解と授業改善にあり、それをもとした生徒への還元にある。

中部地区英語教育学会の紀要第29号（2000年発行）から、論文と実践報告の2つの範疇に分けられた。それ以来、実践研究の割合は増加傾向にあり、45号（2016年発行）からは実践報告・調査研究の論文数が、理論研究・実証研究の論文数を上回っている。さらに、同紀要の第29号から第44号までの実践に関する論文184編のうち122編は、実践研究の要件である問い、データ、分析・解釈の3要素を

含んだ体系的な形態をもつ実践研究である。このように、本学会の特徴として、実践研究が活発に行われている点を挙げるができる。

実践研究の意義は、実践研究を継続することを通し、教師の成長を促すことにある。実践に関する教師の個人的な省察や、他の教師との協働的な省察によって、教師がもつ実践知を深化させる可能性を秘める。本学会では、実践研究を共有する場を引き続き提供し、さらに充実した実践研究の共同体として新たな役割を担っていくことが期待される。

しかし、学会が実践研究を支援する上で、いくつかの課題を指摘できる。まず、学会における実践研究の位置づけである。研究対象に対する認識論の違いを学会内で共有し、認識論の違いを超えた、実践研究の位置づけが求められる。また、実践研究の研究手法についての啓蒙も求められる。実践研究をどう行うべきかという研究のあり方を多くの教師と共有することは、実践研究の質の向上や、萌芽的な実践研究の支援などとともに今後の課題である。最後に、実践研究を共有する場のさらなる充実が挙げられる。学会でのシンポジウムや討論会のテーマとして議論することや、各地区での実践研究の共有の場を支援することなど、今後、様々な方法が考えられる。

小学校



みんなが輝く小学校英語

岡山市立石井小学校「イメージ教育」の取り組み

●B5判(144ページ) ●定価2,200円(本体2,000円+税10%)

兼重 昇先生(大阪樟蔭女子大学 教授) 監修



小学校「二大テーマ」に答えます

～「小学校外国語不安」と「小中連携」の各地域の取り組み～

●B5判(216ページ) ●定価1,980円(本体1,800円+税10%)

どうやって教えればいんだろう・・・
どのように中学校につなげればいんだろう・・・

その答え この本にあるかもしれません!

小学校
外国語
教員向け
教材

中学校

KEY magazine

【キー・マガジン】

中学校版

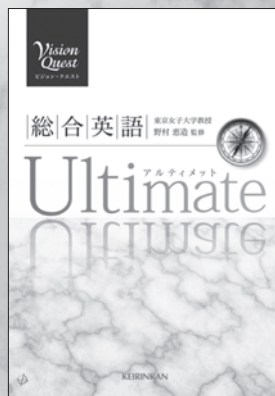


先生たちの「お悩み」や「不安」の解消に!

高等学校

Vision Quest

総合英語 Ultimate



A5判 752ページ
カラー刷
定価1,750円
(本体1,591円+税10%)

別冊

Vision Quest
基本例文集

本物の英語にこだわり、
すべてを究めた参考書、誕生。

— 知が啓く。 —
啓林館

本社	〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	電話(06)6779-1531
東京支社	〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号	電話(03)3814-2151
北海道支社	〒060-0062 札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階	電話(011)271-2022
東海支社	〒460-0002 名古屋市中区丸の内1丁目15番20号 ie丸の内ビルディング1階	電話(052)231-0125
広島支社	〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号 広島CDビル5階	電話(082)261-7246
九州支社	〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号 ハイヒルズビル5階	電話(092)725-6677

CELES 2021

発表要旨

3. 問題別討論会

第1日目 (6月26日)

13:10 ~ 15:10 第1室・第2室

4. 課題別研究プロジェクト報告

第2日目 (6月27日)

(1) 9:30 ~ 11:20 第6室

(2) 12:50 ~ 14:40 第6室

(3) 15:40 ~ 17:30 第6室

5. 自由研究発表

第2日目 (6月27日)

① ~ ④ 9:30 ~ 12:00

⑤ ~ ⑧ 12:50 ~ 15:20

⑨ ~ ⑪ 15:40 ~ 17:30

3. 問題別討論会 (6月26日 13:10 ~ 15:10)

(1) 「国際共通語としての英語」から考える英語科教育

(第1室)

コーディネーター： 藤原 康弘 (名城大学)

提案者： 柴田 美紀 (広島大学)

仲 潔 (岐阜大学)

藤原 康弘 (名城大学)

「国際共通語としての英語」という用語は、これからの日本の英語教育を考える上でのキーワードといってよい。この用語は、文科省が関与する言語政策、学習指導要領の答申、教職課程の指針を示すコアカリキュラムに登場している。しかしながら、実際のところは、表層的に英語の重要性を訴えるスローガンとして消費されがちである。そこでこの問題別討論会では、この言葉を英語教育における「理念」「授業」「評価」の3観点から、解きほぐしつつ、フロアと議論を行うことを目的とする。

まず英語教育の「理念」として、話者の言語態度と対話力について考察し、概念レベルで「国際共通語」を捉え自己の理解を深める必要性を説く。これまで英語のアクセントと聞き手の言語態度との関わりについて多くの研究が行われてきた。しかし、双方向の社会的営みであるコミュニケーションには話者の言語態度も大きく関わる。そこで、まず参加者にタスクを通して、自らの言語態度を認識してもらい、言語態度への気づきも含む「批判的内省力」について考える。

次に実際の「授業」に目を向け、「国際共通語としての英語」という新たな英語教育観に、教育現場はどのように対処できるのかを考える。「国際共通語としての英語」に含まれる理念を伝統的な英語教育観と比べながら整理し、教室現場においてどのような取り組みが可能なのかを考察する。英語の多様性への気づきを喚起することを目指した授業実践や、受講した学習者がどのように受け止めたのかなどを紹介しつつ、教育場面におけるあるべき対処に向けた留意点を模索する。

最後に教育実践後に考えなければならない「評価」の問題についてふれる。一般的に「評価」は英語母語話者の規範に依存してきたが、必ずしも「ネイティブ」をモデルとしない「国際共通語」としての評価をどのように行うべきか、またその評価方法が本当に望ましいのか、フロアと議論を行う。積極的な意見交換を歓迎したい。

(2) 「英語を話せるようになりたい」に学校教育は応えられるか？

—小・中学校でできること

(第2室)

コーディネーター： 犬塚 章夫（刈谷市立亀城小学校）
 提案者： 金沢 優（英会話講師・小説家）
 山本 純一（刈谷市立刈谷南中学校）
 加藤 拓由（岐阜聖徳大学）

本討論会は、パネリストである小説家金沢優氏の著作「もしも高校四年生があったら、英語を話せるようになるか」に登場する英語塾のコンセプトを受け、子供達の「英語を話せるようになりたい」という思いをどう学校現場で実現できるかについて考える。

（金沢優）「教育格差」という言葉を最近、ネットやニュースで見掛けるようになった。そして実際、学校教育に疑問を持った保護者たちが、各家庭で教材を揃え、子供に英語の英才教育を施すケースも増えてきたように思う。恐らく、このまま突き進めば、「英語ができる子」と「できない子」の差が、益々顕著なものになっていくことになる。一体、どうすれば、経済的に恵まれていない子供が、この差を埋めることができるのか、どんな教育が、この時代に求められているのか。大手英会話スクールで沢山の英語挫折者を見てきた私の視点から、今の日本の英語界の現状・問題点について、深く掘り下げていきたい。

（山本純一）今年度、中学校でも新学習指導要領がスタートした。小学校で学習した多くの単語や慣れ親しんだ英語表現を、自分の言葉として使用できる語彙力や文法力に引き上げていくことに難しさを感じる。「もしも高校四年生があったら、英語を話せるようになるか」で登場人物が生き生きと英語を話す姿を、中学校現場でどう実現できるか、実践を紹介したい。

（加藤拓由）学習指導要領の「外国語科の目標」には、小・中・高、どの学校段階でも「言語活動を通して」というフレーズが見られる。また、『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』には「言語活動は、言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別されている。」とある。それでは、小学校外国語(活動)における「言語活動」とはどのように行われているのか。実際の小学校現場で、今、子供達がどのように英語を学んでいるのかを検証しながら、「言語活動」の意味について深く考えてみたい。

4. 課題別研究プロジェクト報告 (6月27日)

(1) 「CLIL とアクティブラーニングによる外国語教育の可能性」3年目発表

9:30～ 第6室

代表： 犬塚 章夫 (刈谷市立亀城小学校)
 共同発表者： 古家 貴雄 (山梨大学)
 太田 圭 (山梨大学附属小学校)
 山本 孝次 (刈谷北高等学校)
 村上 裕美 (関西外国語大学短期大学部)
 安達 理恵 (相山女学園大学)

CLILの可能性をそれぞれが関係する教育機関で実践や可能性について研究してきた。本発表では、その結果としてそれぞれの校種で提案できる活動をまとめた。

古家 貴雄・太田 圭：公立小学校におけるCLIL活動実践報告—外国語科と社会科との統合を通して

本提案は、小学校で実践した外国語科と社会科との統合実践の報告である。CLILの手法を用いて、小学校教諭の視点から構成した。教育課程の中に位置付けられた他教科の学習内容を外国語科に取り入れることのみを目的とせず、統合した教科と外国語科の双方に学びを保證する内容とすること、また、他教科の要素が思考を促す手立てとなることを検証した。

山本 孝次：持続可能な社会の創り手育成を目指したSoft CLILの授業実践

本実践では、持続可能な社会の創り手を地球規模課題の解決に自ら取り組んでいける人と定義し、トピックにSDGsを設定しSoft CLIL型の授業を行うことで、批判的思考力と地球市民意識の養成とともに持続可能な社会の創り手育成を目指す。

村上 裕美：大学における映像への英文解説文作成を通じた総合学習

協働学習を通して深い学びを実現できる方法を模索した。反転学習として、英文コンテンツに関係する約6分の無声の映像を選択し、その情報を調査し、個々の学生に映像用の英語の台本作成を課した。内容の精査や情報交換をし、グループの台本としてまとめ、グループごとに映像に合わせた読み上げの発表を行った。指導法と学生の学びについて報告する。

安達 理恵：CLILとラップブック指導による小学校外国語指導法授業の学生への影響

主体的・対話的で深い学びの授業実践と、外国語と児童の指導力向上を支援するため、指導法の授業で、CLILとラップブックを使った指導について紹介・説明した。学んで良かったこと、自分の課題、次から挑戦することの3観点のリフレクションをテキストマイニング分析した結果を報告する。

(2) 「日本の EFL 環境における、生徒の英語でのコミュニケーション意欲を高める指導の工夫—情意面、動機づけ、WTC の観点から」3 年目発表

12:50～ 第6室

代表： 佐藤 臨太郎（奈良教育大学）
 共同発表者： 笠原 究（北海道教育大学）
 富田 房敬（京都両洋高校）
 鷹野 英仁（甲斐市立双葉中学）
 古賀 功（龍谷大学）
 今野 勝幸（龍谷大学）

1. SATO, R. "Thinking About Effective Grammar Teaching That Can Improve Students' Willingness to Communicate (WTC)"

I will suggest an effective grammar teaching approach referring to different perspectives for second language learning, alongside some approaches related to these perspectives. He also talks about its effects on students' WTC evidenced by his studies.

2. KASAHARA, K. "Vocabulary Instruction with Distributed Learning and Testing Effect"

This study suggests that introducing distributed learning and testing effect into EFL classrooms can be a key to make vocabulary instruction efficient and effective. One of the most crucial conditions to establish form-and-meaning connections of new words is repeated encounters with retrieval practice. This can be possible in divided short learning sessions with small quizzes.

3. TOMITA, F. "Commas Save Lives"

Many Japanese high school students don't have a great deal of willingness to read English. They want to avoid having to read long passages. I assume that one reason comes from not knowing the rules of English punctuation, especially the usage of commas. My research question is "Does the students' willingness to read improve after learning the explicit rules of how to use commas?"

4. TAKANO, H. "Activities That Can Improve Students' WTC"

This practical report introduces two activities that can improve students' WTC in the circumstance of ordinary Japanese junior high schools. One is 'an interview with four skills', which integrates basic language skills in one English class. The other is 'an interview with role-playing', in which students use English while playing the roles of a famous person and reporters.

5. KONNO, K. & KOGA, I. "Fostering WTC in the Classroom"

As one step forward to increase students' WTC, we will focus on the impact of the use of English by teachers and students in the classroom. In this talk, we will first revisit the theoretical perspective of WTC and then review three studies investigating the effect of inputs and outputs in English during the lessons on students' WTC.

We hope we have a lot of voluntary oral (not chat) interactions in the Q& A session. We are looking forward to seeing you through the screen!

(3) 「言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開」3 年目発表

15:40～ 第6室

代表： 今井 隆夫（南山大学）
 司会： 中川 右也（三重大学）
 共同発表者： 大瀧 綾乃（静岡大学）
 柏木 賀津子（大阪教育大学）
 近藤 泰城（皇学館大学非常勤）
 中川 右也（三重大学）

言語・認知・学習理論でわかってきたことで英語指導に活用できることは多くある。本プロジェクトでは、それらの理論と実践の橋渡しをすることを行ってきた。

第 1 発表（大瀧）「否定証拠中心の明示的文法指導の効果：英語の自動詞に焦点を当てて」では、否定証拠中心の明示的文法指導が、日本語を母語とする英語学習者の自動詞に対する正しい理解を高めることに効果があるかを検証する。実験では、自動詞に関する誤り等を提示した否定証拠中心の指導を受けた群と、否定証拠無し指導を受けた群に分けた。文法性判断テストの結果、否定証拠中心の指導を受けた群は、否定証拠無し指導を受けた群よりも、平均値が有意に高く、特に「自動詞を伴う他動詞用法は誤り」と正しく理解することについて指導 11 週間後まで効果が見られた。

第 2 発表（柏木）「内容（英文学の活用）と切り離さない文法指導」では、「内容（英文学の活用）と切り離さない文法指導」の在り方について、「用法基盤モデル（Usage-based Model : UBM）」と「内容言語統合型学習（CLIL）」を統合した中学校英語 2 年生を対象とした実践報告をする。ひとまとまりのフレーズの蓄積からフレーズ内の部分入れ替えが起こるよう文構造への気づきを引き出します。同時に、『ガリバー旅行記』（筆者再話）のストーリー・プロットや、原因と結果を考える言語活動を紹介し、生徒の文構造への気づきやイメージスキーマを明示的に落とし込む小中連携の英語文法指導について考察します。

第 3 発表（近藤・中川）では、「アニメーションを用いた現在完了の指導法」について、本プロジェクトの趣旨「言語学や英語学と英語科教育法の溝を埋める」に則り、認知言語学の知見活かしたアニメーションによる文法教材を紹介する。have が持つ中心的なイメージに着目し、「持っている」という動詞の基本の意味から現在完了形まで一貫した説明を試みた。これにより、アニメーションの英語教育における可能性を示したい。

5. 自由研究発表 (6月27日)

自由研究発表 第1室 ① (9:30～10:00)

初等教育教員養成課程の大学生が持つ外国語活動・外国語への意識と課題

【SNS 発信不可】

渡邊 政寿 (上越教育大学) ・大場 浩正 (上越教育大学)

本発表の目的は、初等教育教員養成課程に学ぶ大学生が、小学校外国語活動・外国語の指導に関して、どのような意識を持っているのかを質問紙によって調査し、その結果を基に必修科目である『小学校英語指導法』の内容改善への示唆を述べることである。令和2年度から新指導学習指導要領の本格実施によって始まった必修の小学校外国語活動および教科の外国語の指導に関して、学生たちはどのような点で強みや課題を感じているのか。また、本格実施の前の調査結果と違いはあるのだろうか。

本調査の対象は、初等教育 (小学校) 教員養成課程に学ぶ大学生3年生 99名であり、『小学校英語指導法』を履修している。小学校の外国語 (英語) 教育に関する専門的な内容を学び始めたばかりである。調査項目は、『小学校英語指導者のポートフォリオ』を基に4技能の指導に関するものなど75項目 (26カテゴリー) を設定し、5段階で自己評価してもらった。また、小学校において外国語 (英語) を教えることに対して不安に感じることとその不安を解決するための準備等について記述してもらった。

結果として、「児童の自律」「教室での言語」「授業の目標設定」「授業案の提示」「評価」など10のカテゴリーにおいて平均値2.0を下回った。すなわち、これらのカテゴリーに対しては、非常に苦手意識を持っていると言えるであろう。

自由記述を分析した結果、英語指導に関する不安については、自らの英語力に関するものが多く、とりわけ児童に対して正しい発音を聞かせることができるのかという不安であった。また、文法や単語に対する不安も明らかになった。一方、抱負については、児童に楽しいと思ってもらえる授業をしたいと同時に、楽しいだけでなく、学びを伴った授業にしたいという思いが含まれていた。外国語が教科になったことが影響しているのかもしれない。更に、本調査と過去の調査との比較を通じた考察を行う。

自由研究発表 第1室 ② (10:10～10:40)

初等英語教育の授業実践に対する英語を専科としない学部生の意識—学習内容、教室活動、指導法等をめぐって

【SNS 発信不可】

稲葉 みどり (愛知教育大学)

小学校教員養成外国語(英語)コア・カリキュラム(文部科学省、2017)は、教員養成や研修の拠り所の一つである。その有用性等については、試案の段階で大学教員等の教える側を対象として検証が行われた(東京学芸大学、2017)が、授業で導入する際には、学生等がその有用性や学ぶ意義を十分に理解していることが望ましい。瀧沢(2020)は、学生への調査で、教える側との意識の差や英語専修と他教科等専修の学生との意識の違いを検討している。

そこで、本研究ではコア・カリキュラムで提示されている学習内容、教室活動、指導法等について学生に意識調査を実施し、1)実際に授業で取り入れたいと考える学習内容や指導法等、2)文系と理系の学生の意識の差異、3)学生の意識に関与する要因等を明らかにする。対象は、英語を主専攻としない学部1・2年生である。これらの学生に焦点を絞るのは、当該科目の必修単位数が限られており、より効果的な教育プログラムの開発が求められると考えるからである。

調査では、コア・カリキュラムを基に設問を作成し、「小学校外国語活動・外国語科の授業で取り入れたい内容かどうか」について5件法で回答を求めた。分析の結果、1)調査項目全体について概ね取り入れたいと認識し、否定的に捉える項目はなかった、2)文系、理系ではあまり差異は見られなかった。さらに、3)探索的因子分析により意識に影響を与える要因として「話す・聞く」「読む・書く」「目標・評価」等の複数の因子が抽出された。結論として、意識の高い項目はコミュニケーションを主軸とした教室活動や指導法で、意識の低い項目は音声指導、評価等の英語教育の専門的知識を必要とする項目であることが分かった。この結果は、瀧沢(2020)の調査で学生が有用であると認識する項目と類似していた。得られた知見は効果的な授業づくりに活かしたいと考えている。

自由研究発表 第1室 ③ (10:50～11:20)

教育職・保育職を目指す学生の英語絵本の読み聞かせ活動を通じた英語への自信の変化について

【SNS 発信不可】

宮腰 宏美 (岡崎女子大学)・竹内 美都 (中部大学非常勤講師)

本研究では、教育職および保育職を目指す学生が英語絵本の読み聞かせの活動を通し、英語への自信を上昇させることができるかどうかを検証したところ、グループでの英語絵本の読み聞かせ活動が終了した第12回の授

自由研究発表 第1室①～④

業時に行った質問紙調査の結果では、発音と音読に対する個々の学生の自信は一時的に増加した。しかしながら、その後、個人での英語絵本の読み聞かせ活動の発表を各自が録音、TEAMS へ送信・シェアという形で実施した際の授業終了時に行ったアンケート結果では、個々の学生の自信は、授業開始時とほぼ同じ結果となり、自信を高めたとは結論づけられないことが判明した。

第12回までの英語絵本の読み聞かせでは、大型絵本を使用したグループ読みを対面で行った発表、第13回から第15回までの取り組みは、個人で英語絵本の読み聞かせ活動を練習し、それを各自音声録音という形でTEAMS へ送信・シェアするという発表形式であった。それぞれの取り組みがグループ読みと個人読み、対面発表と音声録音での発表という形の変化から、どの要素が自信の減少の要因となったかは定かではないため、次回の研究の課題となる。

自由研究発表 第1室 ④ (11:30～12:00)

新学習指導要領移行期における小学校外国活動・外国語科の取組—英語教育課程検討委員会の取組を通じて

中野 聡 (北陸学院大学、元静岡県富士宮市立東小学校)

2020年度から小学校3・4年生には、外国語活動が年間35時間、5・6年生には、外国語科が年間70時間実施された。加えて、初めての検定教科書を5・6年生は使うことになった。これらのことは、小中学校にとって大きな変化である。というのは、小学校の教員も英語教育に本格的に取り組む必要があり、中学校は小学校で英語を学んだ生徒を受け入れて、今までとは違った指導の内容や指導方法の意識改革が求められるからである。

2018年度、2019年度の新学習指導要領移行期におけるA市としての取組について報告する。全国的に様々な取組が行われていることを承知したうえで、ALTの増員でもなく、大規模なICTの導入でもなく本市がこの取組をしたのは、より多くの教員に指導する当事者意識をもって英語教育に取り組んでほしいと考えたからである。英語を教える力量を高め、少しずつ自信をつける教員を一人でも増やしたい。また、できるだけ、旧来からある組織を活用し、工夫して取り組むことで、より多くの教員が参画意識を持って、効果的に英語教育の方向性を共有したい。これらの目標達成のために、英語教育課程検討委員会を立ち上げた。

この組織を中心に、これまであった小学校、中学校の研究部会、指定を受けた小学校、中学校、県立高等学校とも連携した。具体的な取組として①4学年分の単元指導計画づくり、②小・中の連携を意識したCAN-DOリストづくり、③指定を受けた二校の公開授業指導案検討・作成支援、④勤務時間終了後に行う英語研究会(自主研修会)の具体的な取組について報告する。これらの取組とその成果、今後の改善に向けての視点まで報告できたらと考える。

自由研究発表 第2室 ① (9:30～10:00)

概要を捉える力を高めるための聞くことの指導—中学校2年生の実践事例

【SNS 発信不可】

野口 育美 (信州大学教育学部附属長野中学校)

平成29年告示の中学校学習指導要領では、聞くことの領域別目標として、「イはしっかりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。」が示された。聞いて得た情報を整理して話の構造を捉えたり、あらすじを理解したりすることができるように、言語活動を通して指導することとされた。そこで、移行期間中に、中学校2年生を対象に、言語活動を通して、概要を捉える力を高めるための聞くことの指導実践を実施した。

単元名は「Rediscover Our Hometowns」である(令和2年12月・全9時間)。教科書(New Crown、三省堂、Lesson 8、India, My Country)の登場人物であるラージ、教師やALTなど様々な人物の地元紹介を聞いて概要を捉える言語活動を中心に据えた。

単元計画は、以下の通りである。第1時、ALTの地元紹介を聞き、感想をやり取りしながら、単元の学習問題を「What are hometowns for us?」と据えた。第2～6時、教科書の本文(GET、USE Read)を聞いたり、資料映像を視聴したりした。第7～8時、教師の地元の様々な場所での思い出話や、別のALTが地元を誇りに思う三つの理由を聞いた。第9時、自分の考えをまとめ、単元の学習を振り返った。

概要を捉える力を高めるために、メモしながら聞き、聞き取った情報を英語で確認した。そして、図や表を用いて情報を整理する活動を行なった。聞いた英語の構成を意識して整理している生徒を紹介し、ワークシートを基に、生徒とやり取りしながら聞き取った情報を全体で共有した。その後、聞いた内容についての考えや感想をやり取りする場を設け、やり取りしたことを全体で共有した。聞いた内容に基づいて理由を話すことを意識させた。

メモや情報を整理したワークシートと授業の振り返りに基づいて、聞くことの指導の成果を分析する。

自由研究発表 第2室 ② (10:10～10:40)

中学3年生のやり取りにおける意見の再構成に関する実践研究

吉崎 理香 (富山大学人間発達科学部附属中学校)

岡崎 浩幸 (富山大学大学院教職実践開発研究科)

本実践研究では、中学3年生が意見や考えをやり取りする際に、自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見をふまえて自分の意見を即興で再構成して発話することができることをゴールの姿としている。「再構成」とは、学習指導要領解説にある「相手の発話に応じ、それに関連した質問や意見を述べながら話題に関する理解を深め、

合意できる部分やできない部分を整理して意見を述べる」ことである。リサーチクエストは、1) 中学3年生が自らのやり取りの後、ガイドシートを用いて振り返る時間を設けることが、相手の意見をふまえて自分の意見を再構成することを促進するか。2) 相手の意見から自分の意見を繋げるために便利な表現を導入することで、中学3年生が相手の意見との繋がりを意識してやり取りすることを促進することができるか、である。1) で用いているガイドシートの目的は、生徒がペアで行ったやり取りの振り返りの際に、相手の意見を聞いて理解しているか、自分の意見だけでなく相手の意見をふまえてやり取りを行うことができたか、という観点から、自分たちのやり取りを振り返ることができるようにすることである。

本実践は週4回の毎授業で行う帯活動として、2か月間導入した。生徒は、ALTの身近な困り事などの悩みをリスニングタスクとして与えられ、それに対する自分たちの意見交換を通じ、ペアで合意形成をしてALTにアドバイスすることをやり取りの目的とした。実践の前後で実施した生徒アンケートのデータと、振り返りの際に使用したガイドシートへの生徒の書き込みから、生徒が以前よりも相手の発話を丁寧に聞き取り、やり取りの一貫性を強く意識するようになったこと、それと同時に自分の意見を再構成する難しさも感じていることが明らかになった。また、speakingの未熟な生徒ほどチャンクで発言しようとする事、英語でのturn-takingに不慣れであることが課題として残った。

自由研究発表 第2室 ③ (10:50 ~ 11:20)

高等学校の英語授業における「話すこと(やり取り)」の授業改善の効果について

【SNS 発信不可】

田中 知聡 (山梨県立甲府昭和高等学校)

令和4年度からの新学習指導要領実施に向けて、4技能5領域それぞれの力を統合しながら思考力・判断力・表現力等を育成し、生徒が主体的・対話的で深い学びができるような授業実践や、授業と評価を一体化するための準備が進められてきている。しかし、発表者が現場での実践が最も難しいと感じていたのは、「話すこと(やり取り)」の言語活動である。

生徒は、問いが与えられている日常的な話題についてであれば、即興でのやり取りすることはできても、内容に深まりが見られない。また、社会的な話題についてのやり取りとなると、「難しい」「できない」「なぜそのテーマについて話さないといけないのか」といった声が聞かれる。このような現状を背景とし、その原因を分析し、令和2年度は一年間を通して授業改善を行うことにした。対象は、前任校で「英語表現Ⅱ」を履修していた生徒27名である。

まず、授業の目的を示し、生徒と目標を共有した。生徒に興味・関心のあるテーマを挙げさせ、一つのテーマから多様な「問い」を考えさせ、社会的な話題について「問う力」を育成する授業を行った。生徒が自分の意見を持てるように、様々な視点や立場から思考を広げたり深めたり、理由や具体例を挙げて表現したりする活動を行った。生徒の様子を観察し、支援をするように心がけた。パフォーマンステストでは、生徒が授業で身に付けてきたことを発揮できるようにした。

その結果、生徒の授業中の取り組み、パフォーマンステストに向かう態度、やり取りの内容に変容が見られた。本研究の目的は、どのような授業改善が生徒の変容につながったかを分析することである。生徒がそれぞれの目

標に向けてどのように変容してきたか、また発表者自身がどのように考え方を変えて実践してきたかを、一年間を通した指導過程と授業観察、パフォーマンステストでのやり取りやレポート、生徒の振り返り、アンケートをもとに報告したい。

自由研究発表 第2室 ④ (11:30～12:00)

ノート・プレゼンテーションにおけるライティングおよびスピーキング指導とそのCAF分析

【SNS 発信不可】

蕨 知英（上智大学大学院生）

新型コロナウイルスの影響により一斉休校措置が取られ、オンライン授業の導入が急速に進んだ。その結果、教室を離れた学びの重要性が高まり、オンラインと対面授業のハイブリッドでの学びの在り方が模索されている。休校明けの教育現場では、学びの遅れを取り戻すために、教科書の学習範囲を網羅することが優先されたため、生徒の休校期間中の学びに関してフィードバックをする機会が十分に確保できていないと言いがたい。そこで、学習者が主体的に家庭学習に取り組む機会を提供しつつ、対面授業でその成果を発揮させるために教師がどのような指導とフィードバックをすればよいかという問題意識を持つようになった。

実践者は私立高校1年生の22名を対象に、2020年4月から1年間の実践研究に取り組んだ。コミュニケーション英語I（CROWN I）の教科書本文に関するノート作りを通して、家庭学習でのライティング力の向上を図った。また、単元ごとにノートの内容について対面授業でのプレゼンテーションを実施した。年度当初のオンライン授業からノート・プレゼンテーションを実施するまでの指導の流れと、実施してからの指導やフィードバックの在り方について週一回の頻度で書いたジャーナルを基に振り返った。

本実践研究の目的は、生徒の初回と最後のプレゼンテーションの書き起こしを統語的複雑さ・正確さ・流暢さの観点から分析しつつ、実践者の指導やフィードバックの変容を明らかにすることである。統語的複雑さに関しては、KH-Coderによる特徴語の出現回数などを共起ネットワーク図やクロス集計で示し、正確さについてはエラーのない節の数、流暢さは語数により分析された。その分析によって抽出された特徴的な生徒数名に焦点を当て、成果物の中身や、それに対するフィードバック、指導の在り方を振り返ることで課題が浮かび上がってきた。発表では、これらの授業実践の成果を報告し、参会者の先生方と意見交換したい。

自由研究発表 第3室 ① (9:30～10:00)

基礎・基本の難しさ—中学3年生のbe動詞の学び直しを通して

宮崎 直哉 (掛川市教育委員会)

本研究ではbe動詞についての学び直しを経て、be動詞がもつ伝達機能や意味を生徒自身が見つけながら考えていく過程を報告する。

be動詞は英語学習の初期に触れるが、主語に応じて使い分けが必要であり、なおかつ一般動詞のような動作が伴うものではないために、真剣に理解しようと取り組む学習者であるほど疑問をもつことはある。このような疑問に囚われずに多くの英語表現に触れ、何気なく理解し発信できる場合も多く、be動詞を深く理解したりすることは現在の英語学習には求められていないのかもしれない。しかし、自然な疑問に対して真摯に向き合うことで学習者の意欲も高まるだろうし、言語のもつ面白さに触れることもあるだろう。

本実践に関わった生徒は中学3年生であり、12月から3月にかけて、自主的に学び直しを進めた。その中で最も時間を割いたbe動詞を取り上げている。該当の生徒からは英語学習の初期段階にbe動詞の理解に苦しみ英語学習に対して苦手な気持ちをもったことや、進行形や受動態などの文でも理解に苦しむ様子が語られた。そこで学び直しの過程の中では、今までの学習内容を単純に繰り返し復習するだけでなく、授業者自身がbe動詞について調べ、意図的に例文を提示し、学習者に英文の状況やどのような意図をもっている文なのかを共に考えるように働きかけた。本実践ではこれらの授業者と生徒だけの関係だけでなく、学び直しを行う中で並行して行われている通常の授業の記録から生徒が少しずつ英語表現の意味を見つけ出す過程を追い、生徒自身も持っている知識や考え方を駆使して考えていく過程や生徒自身の学習に対する姿勢の変容について考察する。学び直しの最適な方法は学習者の数だけ存在すると考えられるが、そのような中の1つのケースとしてbe動詞の学び直しの実践を提案したい。

自由研究発表 第3室 ② (10:10～10:40)

認知文法を援用した意識化タスク

【SNS発信不可】

島田 勝正 (桃山学院大学)

意識化指導とは、明示的で演繹的な文法説明に代わり、データの中から規則を発見させようとする暗示的で帰納的な指導方法である。データ駆動型の意識化タスクでは、データの整理・分類により形式上の違いという規則性が見いだされる。しかし、文法項目によっては、特に単一文の場合には、その言語形式上の違いという規則性にどんな意味があるのかまではわからない場合がある。本研究の目的は、このようなデータ駆動型の意識化指導の問題点を指摘し、認知文法を援用した意識化タスクを開発することにある。

認知文法では言語を認知の統合的な側面として扱い、文法現象を意味のあるものとしてみなす。そして、場面は、言語形式で直接的に反映されるものではなく、認知的な事態把握によって反映されていると考える。つまり、物事に対する認知的な捉え方の違いが、言語形式の違いに反映されていると考えている。本発表では、認知文法のアイコン性と卓越性について、事態把握の近接性・距離の原則、および、トラジェクターとベンチマークの配列の概念を概説し、これらの認知文法の知見を援用した規則性に意味を見い出す意識化タスクの例として、不定詞と動名詞、仮定法、受動態を扱う意識化タスクを提示する。

自由研究発表 第3室 ③ (10:50～11:20)

高校英語授業における翻訳行為とそのメタ的意味付けの実践報告

川村 拓也 (静岡聖光学院中学校・高等学校)

本発表は、静岡県内の私立高校2年生7名に対する英日翻訳を取り入れた授業実践における生徒らの表れを報告することで、高校・中学校の英語授業に翻訳タスクを取り入れることの教育的意義を示すことを目的としたものである。

訳すという行為は、英語教育に関わる人の間ではコミュニケーションな言語活動であるとは捉えられてこられず(ピム、2017)、英語教育の現場においては長らくの間「悪」とみなされることが少なくない(クック、2012)。一方、現行の学校英語教育において育成することが目指されている「コミュニケーション能力」の捉え方にも問題が指摘されており、仲(2017)は英語授業に(1)コミュニケーションを成立させようとする過程にプロセスを当てる、(2)様々な解釈の可能性を体験する、(3)学習者に様々な役割を用意し居場所を与えるという3つの観点を取り入れることを提案している。

本実践では上記(1)と(2)を念頭に、「訳す」という行為を意味の伴わない逐語的な置き換え作業ではなく、原文の話者によって意図された意味の再構築とその伝達を試みるプロセスとして取り入れた。具体的には、2005年のスタンフォード大学の卒業式でのスティーブ・ジョブズ氏のスピーチの一部を日本の学生にも理解してもらうために日本語に翻訳し、教員からの発問に答える形でその訳を選んだ意図や、他の生徒の訳との違いを説明するという活動を行なった。

本実践報告では生徒らが原文と翻訳文との構造的な一致(形式的等価)や、話者の意図と翻訳文の読み手へのメッセージの伝わり方の一致(動的等価)を意識しながら、それぞれがコミュニケーションの担い手としてどのような意図を持ちながら翻訳を行ったのかを明らかにする。

自由研究発表 第3室 ④ (11:30～12:00)

日本人高校生による自動詞の過度受動化—態判断課題を用いて

【SNS 発信不可】

岡田 美穂子 (名古屋大学大学院生)

日本人英語学習者は*The earthquake was happenedのように自動詞の過度受動化の誤りを犯すことが指摘されている。英語の自動詞は主語の意味役割により非対格動詞と非能格動詞に分けられ、非対格動詞が対象や経験主を主語に持つのに対して、非能格動詞は動作主を主語に持つ。このことから、Oshita (2001)は「非対格動詞畏仮説」を提唱し、非能格動詞の過度受動化の誤りは熟達度のどの段階でも少ないのに対して、非対格動詞の習得は熟達度によりU字型曲線を描くと主張する。

また、非対格動詞は他動詞としても用いられる自動詞他動詞両用と自動詞用法のみの2種類に分類され、自他両用の非対格動詞の態の選択はその他動詞用法による影響も受けるため誤りが多いとされる。さらに、主語の有生性が態の選択に影響を及ぼすことも、様々な研究者が指摘している。このことから主語の有生性と過度受動化との関係にも注目する。

本研究は、日本人高校生 210 人を対象にした態判断課題でのデータを用いて、自動詞の種類、熟達度、主語の有生性の3つの要因に焦点を当て、Oshita (2001)の仮説を検証した。その検証のため、統計ソフトRで一般化線形混合モデル(GLMM)の最適モデルを探し、3つの要因の単独効果や交互作用の結果を分析し、考察を行った。同時に、Okada (2020)での同じ高校生を対象にした態産出課題の結果との比較により、実験方法(タスク)の違いが結果に及ぼす影響についても、同じく3つの要因に焦点を当てた考察を試みる。

2

日

目

研究
プロジェクト
課題別発表
①
④
自由研究発表
⑤
⑧
自由研究発表
⑨
⑪
自由研究

自由研究発表 第4室 ① (9:30～10:00)

教師の動機づけスタイルがエンゲージメントに及ぼす影響 —英語授業における心理的欲求を媒介として

【SNS 発信不可】

染谷 藤重 (京都教育大学)

自己決定理論では、動機づけスタイル、基本的心理欲求、及びエンゲージメントは正と負の両側面を持っているとされる。具体的に言えば、動機づけスタイルは自律性支援及び統制的指導、基本的心理欲求は欲求充足及び阻害、エンゲージメントは、エンゲージメント及び非エンゲージメントに分かれるとされている。本研究では、大学1年生316名(男性:130名;女性186名)にアンケート調査を行い、高等学校の時の英語の授業における教師の動機づけスタイルが授業における心理的欲求を媒介として、エンゲージメントにどのような影響を及ぼしているかについて明らかにすることを目的とする。調査は、2021年4月初めに行われた。データをSEMを用いて分析を行った結果、自律性支援的な指導は、「自律性支援」→「心理欲求充足」→「エンゲージメント」という形に授業内での心理的3欲求の充足を媒介することによって、エンゲージメントを予測していることが明らかとなった。また、統制的指導に関しても、「統制」→「心理欲求阻害」→「非エンゲージメント」という形に心理的3欲求の阻害を媒介変数として、非エンゲージメントを予測するということが明らかとなった。さらに、自律性支援と統制的な指導の間には、負の相関が存在し、心理的3欲求の充足は、非エンゲージメントを負に予測することから、自律性支援的な指導を促進することによって、統制的な指導を抑制し、欲求阻害や非エンゲージメントにつながることを防ぐことができると考える。また、自律性支援的な指導を行い、欲求充足を促進することによって、非エンゲージメントへ陥ることを阻害することができるかと捉えることができる。上記の結果より、高等学校の授業における統制的な指導を減らし、自律性支援的な指導へ移行していくことが学生(生徒)の授業へのエンゲージメントの促進、英語力の向上につながると考える。

自由研究発表 第4室 ② (10:10～10:40)

コーチングと自己調整学習の理論に基づくモチベーションの途切れない授業デザイン

石田 正寿 (三重県立川越高等学校)

文部科学省の基本的な見解として、「主体的に学習に取り組む態度」は「学びに向かう力・人間性等」の中に含まれ、「学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしているかどうかという、意思的な側面」を捉えて評価し、育成していくものとされている。つまり、ここでの要点は、学習に関する自己調整の実行と、学びに向かう意思にある。そこで、その実行と意思の育成に際して、コーチングと自己調整学習の理論に基づいて授業デザインをすることで、生徒のモチベーションが途切れない授業

をデザインすることができるのではないか、というのが今回の研究の着想に至った契機である。今回の発表では、その提案とこれまでの生徒の反応を報告したい。

自由研究発表 第4室 ③ (10:50～11:20)

『中部地区英語教育学会紀要』における質的研究の報告基準に関する検討

【SNS 発信不可】

田所 貴大 (宇都宮大学)

本研究の目的は、『中部地区英語教育学会紀要』第1号から第50号(1971-2021年)までの掲載論文を分析し、中部地区英語教育学会における質的研究論文の報告方法を明らかにすることである。近年、質的研究論文の報告におけるガイドラインが作成されており、American Psychological Association (2019) の Qualitative Design Reporting Standards (JARS-Qual) などがある。例えば、JARS-Qual では、データ収集・分析方法から、参加者の情報、研究者のバックグラウンドなどの報告について諸項目が挙げられている。このように、質的研究手法を用いた論文には、「厚い記述」が求められている。これは、文章量が多ければ良いということの意味していないが、『中部地区英語教育学会紀要』では論文の長さが最大8ページと規定されており、その紙面上の制約により生データの掲載などの報告の工夫が求められるはずである。このことから、これまでに『中部地区英語教育学会紀要』に掲載された質的研究論文における報告方法を明らかにすることで、質的研究手法を用いた論文を『中部地区英語教育学会紀要』に投稿する際の基準を示唆することができる。

分析対象は、中部地区英語教育学会40周年記念DVD媒体『あゆみ』に収録されている紀要第1号から第40号(1971-2011年)までの論文(k=1578)とJ-STAGEにアップロードされている第41号から第49号(2011-2020年)までの論文(k=364)と第50号に掲載されている論文(k=34)とした。

質的研究論文の抽出基準は、インタビューデータや自由記述質問紙などによって得た「質的データを取り扱っている研究」とした。その後、Tojo and Takagi (2017) および藤田ら (2016) を参考に、以下の枠組みでコーディングを行った。著者が質的研究と明記しているかどうか。どの質的研究の理論的枠組み・方法や手法を採用しているか。参加者はどのような人か。どのようにデータを収集したか。どのようにデータを分析したか。また、JARS-Qual を参考に、どのような報告がなされているかを明らかにした。

自由研究発表 第4室 ④ (11:30～12:00)

ウェブ調査をはじめとした非確率標本の補正—英語教育における意識調査・実態調査への応用

寺沢 拓敬 (関西学院大学社会学部)

本報告では、非確率抽出の質問紙調査の補正方法を概観し、英語教育研究・応用言語学における意義を論じる。この分野では、英語使用や英語教育に関する人々の行動・態度・意見について質問紙調査が行われることがあるが、そのほとんどは、確率標本抽出 (= ランダム抽出) ではなく、非確率標本抽出 (便宜抽出やスノーボール抽出、調査会社のモニターを利用したウェブ調査) である。よく知られているように非確率標本には代表性の点で問題が多いが、英語教育学界で具体的な改善策が議論されることはほとんどない。現状は、「安易な一般化には気をつけるべし」と注意喚起が行われているのみだろう (ただし具体的にどう気をつけるべきかは議論されない)。

一方、計量社会調査の分野では、非確率標本調査 (とくにウェブ調査) を補正・改善する方法に関して議論が蓄積されつつある。そして、これは英語教育の調査でも、いくつかの条件をクリアすれば、容易に実行可能である。したがって、利用を積極的に検討すべきである。

その条件とは、具体的には、(1) 当該の非確率標本調査に、既存の確率標本調査と共通する設問が含まれている、(2) その共通変数の情報は、前者を、後者の構成比に近づけるのに役立つ、(3) 分析者に回帰分析の基本的な知識・技術がある (補正のための汎用ソフトが存在しないため) の3点である。

本報告では、発表者が行った英語使用実態調査 (ウェブ調査) を素材にして、実際に上記の3点がいかにクリアできるか、そしてどのように補正値が推計できるかを示す (具体的には、傾向スコアを用いた層化重み付け法による補正を報告する)。そのうえで、補正後の値がどれだけ質の改善に寄与したかを評価する。最後に、この補正方法が、英語教育研究の別のタイプの調査 (たとえば、ESP や意識調査) にどのように応用できるか議論する。

自由研究発表 第5室 ① (9 : 30 ~ 10 : 00)

Five Ways to Integrate an Email Magazine into Everyday Teaching

Jarrell Douglas (南山大学非常勤講師)

The presenter will discuss the benefits to Japanese students of integrating supplemental EFL materials that emphasize meaning over grammatical examples, unlike MEXT-approved textbooks that concentrate on teaching grammar forms of English. Daily posts in an email provide examples of how the language is actually used in everyday life and are available on a variety of platforms including Facebook and Twitter. The posts are written in simple English, making them comprehensible to the students who have learned the basics of English in their first two years of junior high school. Ease of comprehension helps to reduce the students' affective filters, and the familiar, topical content motivates them to read regularly.

The presenter will go on to demonstrate five different ways to integrate posts from the daily email magazine Jaremaga into everyday teaching.

For in-class usage, the posts can be downloaded and printed out in advance. Each passage is approximately 100 words in length, making it short enough to be a quick listening or reading exercise.

- (1) The passage can be read by the teacher, the ALT, or even text-to-speech software, and the students work together to piece together the passage.
- (2) The passage can be used as a shadowing exercise to improve both speaking and listening skills.
- (3) The passage can be used as a dictation, reinforcing the link between the written words and their oral representation.
- (4) The passage can be used to increase reading speed, based on the Kitahara method (Kitahara, 2010, Benesse),.

At the university level, where students have only one class per week, the email magazine is suitable for use as an out-of-class assignment.

- (5) Students read the daily email magazine and have to answer questions about them at the beginning of the next class.

自由研究発表 第5室 ② (10:10～10:40)

英語表現 I における自己表現活動の時間確保と指導方法について (実践報告)

杉本 健 (名城大学附属高等学校)

文法指導に終始してしまう傾向がある英語表現 I の授業において、その打開策に関する2つの実践報告をします。1つ目は文法指導において、生徒の文法理解をおろそかにせず、なおかつ自己表現活動の時間を確保する方策について、2つ目はICTを活用した自己表現活動の指導方法についての報告です。文法指導については、生徒が文法解説の動画を家で視聴し、与えられた課題を予習で終えた状態で学校の授業を迎える反転授業のスタイルを1年通して行った流れについてお伝えします。iPadを使った動画の撮影方法、Scrapboxを用いた生徒との共有方法、動画を見てきた生徒に対してどのように授業をするか、週3コマのサイクルと、生徒の反応や今後の課題について報告します。自己表現活動の時間については、パワーポイントの効果を利用したスピーキング活動の実践報告を行います。英語をできるだけ躊躇なく話すための雰囲気づくりや、既習の語彙や文法が即興で出てくるかを確認するためのアクティビティ、論理展開を意識した自己表現活動の実践例、フィードバックの方法についてご報告します。上記2つを掛け合わせることで、英語表現 I の授業が文法理解だけでなく、学んだ英語の活用になるという実践例をご報告します。

自由研究発表 第5室 ③ (10:50～11:20)

ICT 機器活用による児童の文構造への気づき"

中田 葉月 (寝屋川市立第五小学校)

本実践の目的は、「CLIL 授業において、児童が文構造に気づくことができる ICT 機器の活用」である。

2020 年度より外国語活動が教科化され、小学校高学年で外国語科が始まった。教科書を活用した指導が始まり、Small Talk や文字指導なども必要となったが、英語の教授法を知らない大部分の小学校教員にとっては、移行期間を経ているが、ハードルが高いものであると感じている。特に Small Talk に関しては、既習事項の活用とはいえ週2回の授業では、児童のアウトプットにつなげることは難しく、意味のある豊富なインプットが必要である。そこで、教科内容を使用し意味のある英語使用場面を設定することができる、内容言語統合型学習(Content Language Integrated Learning=CLIL)による授業でティーチャー・トークを行い、Small Talk での児童の発話につながるインプットを行いたいと考える。

同じく2020年度から始まったGIGAスクール構想事業で、児童・生徒に一人一台のタブレット端末が配布された。外国語学習とICT機器の親和性が高いことについては以前より指摘(文部科学省、2020)されており、特に外国語では、「海外とつながる「本物のコミュニケーション」により、発信力を高める」「一人一人が海外の

自由研究発表 第5室①～③

子供とつながり、英語で交流・議論を行う」「ライティングの自動添削機能やスピーキングの音声認識機能を使い、アウトプットの質と量を大幅に高めることが提案されている(文部科学省、2020)。

今回の実践では、Small Talk での発話につながる言葉の創り出し (productivity) をささえる、文構造の気づきを促すため、タブレットパソコンを活用し、表現の入れ替えを体験的に行った児童の様子を報告する。特に、CLIL 授業におけるティーチャー・トークでのインプットや、そのインプットによるターゲットセンテンスを並べかえる様子、使用する単語や英語表現の入れ替えを行う児童の様子や、スムーズな発表を行う児童の様子なども報告する。

文部科学省(2020). (リーフレット) GIGA スクール構想の実現へ

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_0001111.htm より取得

2

日

目

研究
プロジェクト
課題別発表
①
④
自由
研究発表
⑤
⑧
自由
研究発表
⑨
⑪
自由
研究

自由研究発表 第1室 ⑤ (12:50～13:20)

英語授業での発問を学ぶ大学教職科目における学生の認識と学びの変容について

田中 武夫 (山梨大学)

中学校および高等学校での英語授業において、テキスト主題や筆者の意図を深く理解させたり、テキスト内容に対する生徒の考えや意見を英語で述べさせたりする指導が、求められている。しかし、英文和訳や文構造の解説にとどまり、そのような指導が十分なされているとは言えない。発表者は、英語の読解指導における教師の発問づくりに焦点を当て、発問の具体例や活用方法について提案してきた。

現在、発表者は、大学での教職専門科目の授業において、学部生を対象に、英語授業における教師の発問づくりを体験させる授業を行っている。この科目では、中学生を対象とした英語授業において、テキスト理解や英語でのやり取りを促すような教材研究および発問づくりを行わせ、他の受講者を中学生に見立て、考案した発問を使って模擬授業を行わせている。

発表者が担当するこの授業において、受講者がどのように取組み、変容しているのかを具体的に振り返ることはこれまでなかった。そこで、以下の問いを立て、学生の感想や課題などをもとに実践を振り返る。1) 教材研究、発問づくり、英語を使ったやり取りに対する学生の認識にどのような変容が見られるのか。2) 発問づくりを経験することで、学生の考える発問やそれをもとにした英語のやり取りにはどのような変容が見られるのか。3) 発問づくりにおいて、学生はどのようなことに困難や疑問を感じ、発表者はどのように対応したのか。

これらの問いをもとに、発表者自身の授業実践を振り返ることで、大学生である受講生が、英語授業における発問づくりに対し、どのように取り組んでいるかを理解するとともに、彼らが直面する課題を明らかにし、今後この授業科目を実践していく上で、受講者に対しどのような支援が必要かを考察する。

自由研究発表 第1室 ⑥ (13:30～14:00)

Zoom を活用した英語科教育法での授業観察の可能性

【SNS 発信不可】

階戸 陽太 (金沢学院大学)

本発表は、英語科教育法で行う授業観察を、Zoom を活用して遠隔で行うことによって、学生と授業者である現職教員、それぞれの学びについて考察を行うことを目的としている。2020 年は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、通常の授業すら困難な状況であった。しかし、学生にとっては1度しかない学びの機会であることには変わらない。そこで、授業観察を依頼した高校教員の協力のもと、管理職の了承を得て、Zoom を活用して授業観察と高校教員との意見交換を実施することができた。授業観察、意見交換を通じた学生の振り返りと、高校教員へのインタビューを質的に分析することで、遠隔で行う授業観察を通じた可能性を、学生と教員それぞれの

立場から考察し、提示する。

授業観察は、緊急事態宣言が解けた後、2020年の7月に実施した。授業は大学2年生を対象とした「英語科教育法I」と3年生を対象とした「英語科教育法III」で、高校の授業は「コミュニケーション英語」と「英語表現」であった。授業後には、授業者の高校教員1名と、学生が意見交換の機会も設けた。これまで行ってきた授業観察と同様の形で実施することができた。

学生の振り返りによると、通常の授業観察とは違い、視点が固定されてしまうことや、生徒が何を話しているのか、細かいところまでは見ることはできなかったが、授業の構成を見ることができたという意見があった。また、高校教員からのインタビューでは、遠隔であっても学生との意見交換から気づきがあったことが明らかとなった。課題があるものの、学生、教員双方に学びがあったことが示唆された。詳細な分析結果については、当日の発表で提示する。

自由研究発表 第1室 ⑦ (14:10～14:40)

教職大学院生による英語科と国語科の連携を目指した中学校英語の授業づくりの実践報告

宮川 友梨 (信州大学大学院生)

本発表は、大学卒業後すぐに教職大学院に進学した私がどのように教職大学院で学び、どのように授業実践を実施したのか実践報告するものである。私は、現在英語科と国語科が連携して行う授業をテーマに教職大学院で実践研究を行っている。

英語科と国語科は、学習の対象が言語であるため言語能力の向上において担う役割が大きい教科である。教育課程部会言語能力の向上に関する特別チーム(2016)によれば、指導内容や指導方法を適切に連携させることにより、言語の共通性や言語固有の特徴に気付いていくことを通して、それぞれの教科等における学習も充実させることができると言える。つまり、言語能力の向上を目的とした連携が重要視されている。また、連携の授業づくりを通して教員同士が連携していくことはカリキュラム・マネジメントの観点からも必要性が論じられている。

このような連携の背景を踏まえ、言語能力を構成する資質・能力のうち、思考力・判断力・表現力等に焦点をおいた、英語科と国語科の学びの実現を目指して授業実践を行った。対象となる英語科の授業実践は2020年11月19日に実施した。この実践に至るまでの約1ヵ月半の期間、授業構想と指導案検討を行い、計6つの指導案を作成した。この過程における私の授業への考え方について、「教育実践実地研究」等の教職大学院で開講されている授業と関連させながら、「指導案」「リフレクションノート」「授業記録ノート」の3点から振り返った。

その結果、英語科と国語科の連携について、(a)類似する活動・内容の転用、(b)指導内容の連携、(c)英語と日本語のメタ言語的比較・対照、(d)共通する言語能力を向上させるための指導方法の連携、の形式が考えられること、私は(d)を目指して授業の構想を始めたが、(a)から(d)の形式を行き来しながら検討していたことがわかった。

この紆余曲折の授業構想と指導案検討の過程について報告する。

自由研究発表 第1室 ⑧ (14:50～15:20)

英語教育を柱とした地域における協働

矢野 司 (安曇野市立豊科北小学校)

筆者は、2016年度より二年間、信州大学教職大学院生として「英語教育を柱とした小中間における協働の在り方」について研究を進める中で、「双方向性」「多様性」「対等性」の三つの視点が協働体制を構築していく上で不可欠であることを学んだ。本発表では、三つの視点を基に、筆者が2018年度より勤務する安曇野市立豊科北小学校において、「英語教育を柱とした地域の協働体制の構築」に向けて取り組んできた実践を報告する。

一つ目の「双方向性」については、豊科北小学校と豊科北中学校における「小中連携」の実践報告である。小中間の職員の顔合わせや情報交換会から始まり、互いに授業参観を複数回重ねてきた。その中で、授業を参観するだけでなく、互いの授業に参加し合い校種を越え連携が深まった過程や、その連携が児童にどのような影響があったのかについて報告する。

二つ目の「多様性」については、英語科を中心に行われてきた「小中連携」の成果が他教科の新たな課題意識へと広がりを見せた「中学校区合同教科会」（2019年7月実施）の様子や、同じ中学校区にある豊科東小学校との小中連携を意識した「オンライン交流授業」（2021年2月実施）について報告をする。

三つ目の「対等性」については、学校種・学区などの垣根を越えてより持続的な連携とするために、CAN DO リストの作成や情報共有システムの構築を図る「Azumino Plan」作成に向けて、現在の動きについて報告をする。

以上の三つの視点を中心に、本研究では、英語教育を柱とした地域における協働について、その取り組みから見えてきた成果や課題について考察していきたい。

自由研究発表 第2室 ⑤ (12:50～13:20)

指導と評価の一体化を図る小学校外国語科授業実践—「逆向き設計」論を活用して

【SNS 発信不可】

川村 一代 (皇學館大学) ・岡井 崇 (三重県鈴鹿市立神戸小学校)

2020年度より小学校において新学習指導要領が全面実施となり、5・6年生を対象に教科「外国語」が誕生した。新学習指導要領では、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す資質・能力の三つの柱に整理された。観点別学習状況の評価については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理された。教科となった小学校外国語科においても、これら3観点で3段階評価することとなっている。

教科となった「外国語」では、「英語を使って何ができるようになるか」を明確にして指導・評価を行い、児童の「英語を使ってできること」を確実に増やしていくことが求められている。「英語を使ってできること」を確実に積み上げていくには、ウィギンズとマクタイの「逆向き設計」論にもとづく授業づくりが効果的と考えた。「逆向き設計」論の3段階の授業設計を「外国語」に当てはめ、①英語を使ってできるようになることを目標(評価規準)として設定し、②目標が達成されたかをどう判断するのか(評価基準)を決め、③目標達成へ向かっての指導計画を立てた。授業前に、目標を設定すると同時に具体的な評価基準も定めることで単元のゴールが明確となり、指導と評価が一体となった授業が行いやすくなる考えた。

発表では、6年生を対象とした「逆向き設計」論にもとづく授業実践を紹介し、観点別学習状況の評価の3観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」について、何をどのように評価したかを報告したい。本実践では、3観点の「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を指導・評価するため、ICT(1人1台端末)を活用した。この点についても報告したい。

自由研究発表 第2室 ⑥ (13:30～14:00)

児童の英単語認識に関する研究

【SNS 発信不可】

巽 徹 (岐阜大学)

杉山 由季乃 (郡上市立白鳥中学校)

大澤 優衣 (岐阜大学卒業生)

本研究は、小学校4～6年生の英単語文字認識に影響を与える要因を明らかにしようとするものである。岐阜県、愛知県の公立小学校9校(児童2,525名)の協力を得て「英語クイズ」を実施した。英語で表記した「月

の名前、曜日の名前」が混在したリストを見て、一つだけ含まれる曜日の選択肢を選ぶ問題などで構成されている。児童には選択肢の他、選択の理由も答えてもらった。その結果、「単語の意味」に注目して判断する児童と、単語の長さや文字の太さの違い、共通の文字の有無など、「単語の見た目や形」に注目して判断する児童とが存在することが分かった。

「クイズ」では、児童の学校内外における「総英語学習時間」も併せて調査したが、「総英語学習時間」が220時間に達する児童の8割以上が「単語の意味」に注目して判断しているのに対して、220時間に満たない児童では220時間以上の児童に比べて「単語の見た目や形」の特徴を優先させて判断している児童が多く、意味に着目して判断する児童は8割には達していないことが分かった。2016年度から5年間にわたり同様の調査を行ってきたが、8割程度の児童が「単語の意味」に注目して判断するようになるには「総英語学習時間」が概ね200～220時間程度が境目であることが明らかになった。つまり、音声で十分に慣れ親しんだ基本的な英単語であっても、8割以上の児童が文字を見てその意味を想起できるようになるには、児童の「総英語学習時間」がある一定時間に達していることが認識を可能にする要因の一つであることが考えられる。

学年ごとに着目すると、5、6年生は、上記の傾向が見られるのに対し、4年生では、「総英語学習時間」が同程度であっても、5、6年生に比べ意味に着目する児童の割合が少ないことが分かった。また、英単語を見て発音を想起する設問でも4年生と5、6年生では異なる傾向が見られ、他の要因についても今後調査を継続する計画である。

自由研究発表 第2室 ⑦ (14:10～14:40)

小学生の英語文構造に関するメタ言語知識の発達—縦断的調査から見えること

【SNS 発信不可】

江口朗子（名古屋女子大学短期大学部）

本発表では、研究協力校との基礎的研究プロジェクトの一環として、2019年9月に小学4・5年生に実施した「間違いさがしクイズ」（江口・犬塚、2021）を、2021年3月に同じ対象群（5・6年生）に実施して、保護者の同意があり欠損値のないA群（4-5年生）82名とB群（5-6年生）73名について、英語文構造に関するメタ言語知識の発達を縦断的に調査した結果を報告する。

外国語によるコミュニケーションにおいて、対話者の話を理解したり伝えたい内容を表現したりするためには、文に関する知識が必要となる。小学校学習指導要領においても、外国語科では、言語活動を通して英語の語順や語と語の組み合わせを意識化していくことが求められており、小学生が持つ知識の実態を明らかにすることは、中学校へのスムーズな接続に繋がると考えられる。2019年の調査では、標準的語順 SVO の誤り（I soccer play.）、be 動詞の一致の誤り（I are Ken）、助動詞 do の欠落（What color you like?）など8題の誤りを含む文の音声と文字の両方を提示して、①誤りの箇所、②誤りの理由、③修正（カタカナやひらがな可）を自由に書いてもらい、記述をスコア化した。その結果、誤用の種類によって言語の規則や形式への意識化には幅があったが、その傾向は学年間である程度一貫しており、5年生（平均 40.7%）は4年生（平均 15.3%）よりもはるかに意識化が進んでいた。本研究は、それを拡張して、縦断データに基づいて文構造に関する意識化の発達過程を調査した

ものである。スコア化して算出した正答率の結果からは、A群では、外国語活動の4年生(15.3%)から外国語科の5年生(57.1%)にかけて大幅な伸びがあったのに対し、B群では、5年生(40.7%)から6年生(63.7%)にかけての伸びは比較的緩やかであった。発表では、文構造や誤用の種類や個人差にも着目した分析結果を報告し、語順や語と語の組み合わせへの意識化を促すための言語活動の必要性について考察する。

自由研究発表 第2室 ⑧ (14:50 ~ 15:20)

小学校英語授業におけるリテリングの活用と効果

【SNS 発信不可】

米崎 里 (甲南女子大学)

松岡 達也 (同志社国際学院初等部)

米崎 啓和 (近畿大学非常勤)

昨今、日本の学校教育機関においても、イマージョン教育やバイリンガルプログラム、内容言語統合型学習など英語学習に対する多様な英語アプローチの試みがなされてきている。2020年度より小学校において英語が教科化されたことを考えると、今後一層早期英語教育化に拍車がかかることも予想される。それに伴い、特色あるカリキュラムを前面に出すために、とりわけ教科内容を英語で学習するプログラムを推進する学校も増えてくることが考えられる。

本研究では、英語イマージョンプログラムを取り入れている私立小学校4年生を対象とし、イマージョンプログラムを実施する中で見えてきた課題を整理し、その課題を解決するための方策についての実践報告を行う。対象となる児童の多くは小学校入学時から本格的に英語にふれる機会をもつ。一見したところ英語を流暢に話し、申し分のない英語運用能力が身につけていると思われがちであるが、現場では学年が上がるにつれ児童間の英語力の差や文法の正確さといった課題を抱えている。また英語への不安、意欲の向上といった課題も見られる。これらの課題を解決し、かつできるだけ良質のインプットを与え、それをアウトプットにつなげるために、本研究では英語授業でのリテリング活動を試みた。英語の本文学習後、リテリング活動を1学期間行った結果、児童の発話数は増え、また文法の正確さも減少する結果を得ることができた。リテリング活動が児童の英語能力向上に直接寄与したかどうかは断言できないが、課題解決への一助にはなったと考えられる。

元来、リテリング活動は、主に中等教育を中心に行われてきた。一方、小学校児童を対象にリテリング活動の効果を検証した例は少なく、児童の英語に対する不安の緩和、英語能力に対する正しい認識、学習意欲の向上、といった小学校における英語学習全体に対するプラスの効果の検証において本研究が寄与することができれば幸いである。

自由研究発表 第3室 ⑤ (12:50～13:20)

日米の中高生間の海外交流経験学習を通して育む言語意識—母語と目標言語のレターのやりとりから

高畑 伸子 (山梨大学非常勤)

本研究の目的は、中等教育における海外の同世代の生徒同士が、互いの母語と目標言語を用いてコミュニケーションを図りながら、どのような言語意識を持つのか、何を学びとっていくのか、その過程や特徴を明らかにすることである。英語が国際言語であると公言をはばからない昨今の見地から言語は全て等価な立ち位置にあるという視点により海外交流学習を行った。そこから自国と他国双方に対して敬意を持ち、深い理解が促進されるであろうことを仮定した。日本とアメリカの中学生・高校生間のやりとりは、互いのレターを補正しあうことを眼目とした。言語そのものやその背景にある文化や歴史など、認知的な側面のみならず情意的・態度的な側面にも気づいたり関心を持ったり分析したりする生徒が見受けられた。その事例を対象に観察調査と質問紙調査を行った。その結果、学びあう喜び、主体的な深い学び、メタ認知の陶冶が窺われる、いくつかの傾向が見られることが分かった。

自由研究発表 第3室 ⑥ (13:30～14:00)

真に目指すべき All English の授業—ボトムアップ処理再考

藤原 剛 (山梨県立市川高等学校)

今年の3月に卒業したクラスは、学力的には中位程度の生徒で構成され、3年間クラス替えがなく、筆者は2年の時に異動してきて担任になった。1年時よりオールイングリッシュの授業が成立しており、生徒たちはそれに誇りを持ちモチベーションも高かった。様々な活動が活発に行われていたが、筆者が気になったのは各パートの2時間目に和訳が配られた上で生徒間の Q and A などに解答することで、本文が理解されたとしていることであった。これでは、その後表現活動を行っても習得は起こらないのではないかと考えた。実際表現活動では、多くの生徒が書き留めたスクリプトを読み上げ、別の授業の自由英作文でも意味を損なうような語順の間違いが目立ち、自力で英文を構成する力が育っていないと考えた。

1年間はそれまでの授業展開に沿って授業を実施したが、3年時より和訳を配るのをやめた。オールイングリッシュを基本としながら、1時間は生徒にとって難しいと思われる文構造や言語形式について、日本語で明示的な指導を行い、必要に応じてボトムアップ処理ができるようにすることを目指した。

当初、研究発表を目的としなかったため、2、3学年通して同一基準で習得の程度を測定したデータは取っていない。そこで、今春卒業した生徒たちにインタビューして、2年時と3年時の英語の学習方法がどう変化したのかを調べた。

すると2年時は和訳が配られても英文の読み直しはせず、模擬試験や英検など和訳が配られない英文を読む際も、全体として何が書かれているのかを推測しながら理解するトップダウン処理がほぼ全てだった。しかし、3年時は家庭学習で英文を一文ごと読み、初見の英文を読む場面では、トップダウン処理とボトムアップ処理の両方を行うようになったことが分かった。

こうした結果を元に真に目指すべきオールイングリッシュの授業のあり方を、既存の理論を裏付けにしながら提案したい。

自由研究発表 第3室 ⑦ (14:10～14:40)

中学校英語教科書にみられる人種・民族の多様性はどのように変化したか—2016年度版と2021年度版の比較

【SNS 発信不可】

杉山 友希 (西濃学園中学校)

本発表では、2016年度版と2021年度版の中学校英語検定済教科書の比較を行い、二つのバージョンの中学校英語教科書にみられる人種・民族の多様性がどのように変化したかを報告する。2016年度版6種類18冊、2021年度版6種類18冊の中学校向け英語教科書を対象に、①教科書本文およびアクティビティーパートに登場する人物の外見的特徴、②人種や民族に関するトピックや記述が教科書内でどの程度どのように扱われているかという2つの観点から人種・民族の多様性の分析を行った。登場人物の分析の結果、2021年度版の教科書では、特に出身国が明らかにされていない登場人物において、髪・眼・肌の色が濃く描かれている人物の割合が2016年度版の教科書より増加していることが明らかになった。また、2021年度版の教科書の特筆すべき特徴として、2016年度版以前の教科書では見られなかった「髪・眼・肌の色が濃く描かれている、英語が第一言語ではない国の出身の外国人教師」が初めて登場したことが挙げられた。次に、トピックに関する分析の結果、2021年度版の教科書では、2016年度版の教科書と比較して日系外国人に関する記述の量が減少しているものの、全体としては人種・民族に関する記述の量が増加しており、非英語使用地域の少数民族や絵文字の肌の色の種類の多様性のように2016年度版の教科書では扱われなかったトピックが含まれていることが明らかになった。

自由研究発表 第3室 ⑧ (14:50～15:20)

検定教科書における言語活動の分析—Bloom's Taxonomy を指標にして

【SNS 発信不可】

折橋 晃美 (東京家政大学大学院/長野県佐久市立野沢小学校)

2020年度、小学校英語教育が高学年において外国語科という教科となり、その翌年度には中学の教科書も改訂された。検定教科書の質の精査は必要不可欠である。そこでブルーム(1956)の教育目標分類をアンダーソン(2001)らが改訂した Revised Bloom's Taxonomy (以下 RBT) を指標にして、小学校英語全7社14冊の、2021年春には中学校英語全6社18冊における全タスクを、分類、分析、比較検討を行った。

1) 実際の授業場面で使われる教科書記載の言語活動の特徴やコミュニケーションの特徴はどのようなものか
2) Bloom's Taxonomy の分類に照らし合わせたとき、検定教科書の実態とそれらの抱える問題点は何なのか
以上2点を明らかにするために、本稿筆者と研究協力者11名(小学校教師6名中学校教師4名、ALT2名)計12名のチームで精査を行なった。

その結果、各社の特徴が教科書の作りに表出していることが見えてきた。①記憶の領域にはかなり力点が置かれているケースが多いが、②理解が充分でないまま③応用の段階に引き上げる活動や、③応用が充分でないまま④分析の段階に一気に駆け上がる課題の設定が見受けられた。⑤評価が生み出す良質の学びのサイクルがないまま活動を重ねていく傾向が見られるケース、⑥創造の領域がかなり少ないケースも見て取れた。小中接続の観点から鑑みても、分析することや創造することの領域が少ないことは学びのスタイルが小学校から中学校にかけて激変してしまう可能性もある。

今後の課題は、各社の教科書を使用して実際に授業を行った上での分析をすることである。現段階の教科書の内容を Task-based Language Learning & Teaching (Ellis 2003) をもとにアレンジした授業実践の中で、今後の日本の教科書における Task-based Language Learning & Teaching の可能性を探っていきたい。

自由研究発表 第4室 ⑤ (12:50～13:20)

日本人英語学習者の意見文に対する文章観とその形成過程

【SNS 発信不可】

伊東 哲 (東京学芸大学大学院生)

対照修辞学の分野では、日本人の書く文章の特徴についてしばしば指摘される。しかし、日本人英語学習者の作文にみられる特徴は、母語での作文能力や英語での作文経験と運用能力が不足していることに起因する可能性がある (Kubota, 1998) という指摘のように、学習者のパフォーマンスには制約がかかり、彼らは十分に意図を反映できているとは限らない。

そこで本研究は、英作文の学習を十分に行ってきた学習者を対象として、彼らはどのような文章を良いと判断し、書こうと考えているのか、また、なぜそのように考えるようになったのかを明らかにすることを目的とした。調査においては、学習者に対してインタビュー調査を実施して文章観について尋ねた。インタビューは英語教育を専攻する大学1年生を対象とし、フォーカス・グループ・インタビューの手法を用いて行った。インタビューでは軸となる質問として、「良い文章の条件とは何だと思いますか?」「それはいつどこで学んだことですか?」、「(GTEC、TOEFL の問題、採点基準を参照しながら、)今まで話し合ってきたことと見比べて気が付くことはありますか?」「(GTEC、TOEFL の問題について)このような問題にはどのように答えますか?」などを用意した。

インタビューの結果、高校卒業時まで英作文の経験が豊富な学生は、主張の一貫性や、根拠の質、その構成についての意識が強くあり、特に「主張、理由、結論」という3段構成の型を用いる意識を持っていること、その1つの型に頼りがちであること、その構成を英語と日本語の両言語で使用することなどが分かった。またその文章観に至った理由として、小中高を通じた授業で学習したという意識よりも、英検や大学入試といった、明確に評価される場面への対策として学習したという経験を意識していることが明らかとなった。発表では、インタビューを通して明らかになった文章観とその形成過程についての詳細を述べる。

自由研究発表 第4室 ⑥ (13:30～14:00)

大学生日本語母語話者による英文エッセー前方照応の問題点

林 みどり (中京大学)

英文テキストにおける照応には、指示詞 “this (these)”、“that (those)” および “it (they)” などの人称代名詞が使用される。本研究では、日本語を母語に持つ英語学習者の、エッセー・ライティングにおける前方照応の問題点を明らかにし、その原因について考察する。データ収集には、日本人大学生による英文エッセーに英語母語話者による添削を付して公開している学習者コーパス「NICER1.3」を使用した。100のエッセー・サン

プルから “this”, “that”, “it” による全前方照応例を抜き出し、添削者によって修正されていない例と修正された例に分けて分析した。結果は、次の4つに集約される。1) “this” による前方照応は、修正率が 0.06%にとどまる。2) “it” による前方照応は、修正率が 24.8%であり、この内の 82.8%が節や文、時に段落全体の大きなユニットで導入された事象への照応である。3) “that” による前方照応の修正率は 37.8%であり、“it” の場合と同様、その 73.6%が節以上のユニットで導入された事象への照応である。4) 上記 2)3)いずれの場合も、“this” への修正を提案されているケースがほとんどを占める。以上のことから、被験者が英文の前方照応に “it” と “that” を過剰使用する傾向があり、それは節以上のユニットに照応する場合に強いことが明らかになった。原因は、日本語テキストにおける照応で最も頻繁に使用される「そ」系指示詞を “it” および “that” と学習者が関連付けることによる母語干渉と仮説を立てることが出来るが、中国語などの日本語とは異なる指示詞体系を持つ言語を母語に持つ英語学習者と比較して、慎重に検討する必要がある。また、“it” と “that” の過剰使用が節以上のユニットの照応に強く見られる原因に関しても、検討が必要である。テキスト内照応は、語用論的制約に基づいて適切に使用されなければ意図した解釈が得られず、円滑なコミュニケーションを阻む原因になる。よって、ライティング指導において今後より意識されることが望ましい。

自由研究発表 第4室 ⑦ (14:10 ~ 14:40)

リーディング中の注視回数と長さ一習熟度による違いが見られるか

【SNS 発信不可】

今村 一博 (武庫川女子大学)

リーディング時の注視(fixations)に関して、読みが熟達するにつれて注視する回数、1回あたりの注視時間が減少するとされている。しかしながら、日本語を母語とする初級英語学習者を対象とした実証データはまだ少ない。

そこで日本語を母語とする 15~16 歳の日本語を母語とする初級英語学習者 52 人を対象に 3 つの英文テキストを読んでもらって、そのリーディング中の視線解析を行った。そしてその 8 か月後に同じ参加者を対象にして、同様の調査を行った。結果として、得られた有効な 42 人のデータを統計処理したところ、プレとポストで、注視回数が有意に減少したが、1回あたりの注視時間は減少しなかった。

また同じ条件で調査した日本語を母語とする中級英語学習者(TOEICの Reading セクションで 200 点以上)15 人と比較すると、初級学習者のプレ、ポストいずれのデータも、有意に注視回数が多く、注視時間が長いことがわかった。

これらの結果から、日本語を母語とする英語学習者に関しても、読みが熟達するにつれて注視の回数が減少することが予想されるが、1回あたりの注視する時間は減少しにくい、つまり減少する割合が小さい可能性が示唆された。

自由研究発表 第4室 ⑧ (14:50～15:20)

スキーマを活用した reading 授業における意識調査と能力の変化

【SNS 発信不可】

花木 柁哉 (一宮市立丹陽中学校)

本稿では、生徒が英語の授業に対して真剣に、前向きに取り組むことができるようにするために、4 技能の中でも「読むこと」をいかに主体的に取り組ませるかが研究の目的である。中学3年生に「読むこと」に関する質問紙を用いて、5件法による量的観点と、学習者に自由記述形式の振り返りによる質的観点から取り組んだ。客観的な数値をもとに全体を定量的に捉えてから、それら数値の背景にある根拠や感情などの要因について自由記述分から考察をした。分析方法は、「KH Corder (樋口、2014) (テキストマイニング)」を用いた。授業の導入では、本文の内容に関するスキーマ(既存の知識を含め、新しい情報の理解に利用してゆく知識の集合)を活性化させることによって、本文の題材を自分事として捉えさせ、主体的に本文を読ませることで「読むこと」に対する苦手意識を軽減させる。結果は、生徒が「読むこと」について得意だと感じる生徒が増加したことが明らかとなった。その要因として、本文の内容が面白いと感じるような導入によって「読むこと」に対する動機付けができたこと、入試問題や長文問題に継続して取り組むことで、問題に慣れてきたことなどが挙げられる。生徒の意識が向上した一方で、定期テストの正答率は横ばいであったことが課題として挙げられる。今後は、テキストマイニングで語と語の「関連が強い」と明らかになった言葉のグループごとに、さらに細かく質問事項を設定し、意識調査を継続していく。そうすることで「読むこと」に対して、得意、苦手などと捉えている生徒の満足感や困り感などが分かると考えているからである。また、パワーポイントを授業の導入として使用したことが生徒にとって、ある一定の満足度を得ていたことがわかった。生徒が題材と双方向のコミュニケーションをとり、主体的に「読むこと」に取り組ませたい。

2

日

目

研究
プロジェクト
課題別発表
①
④
自由研究発表
⑤
⑧
自由研究発表
⑨
⑪
自由研究

自由研究発表 第5室 ⑤ (12:50～13:20)

ランゲージングにおける「協働的足場かけ」の研究

市川 裕理 (豊田工業高等専門学校)

Swain (2006) が提唱するランゲージングは、Vygotsky の社会文化理論に依拠するものであるため、協働対話においては新しい知識構築がなされているか、深い理解を促しているかという ZPD (Zone of proximal development) が作り出されることを前提とする。その場合、ピアが協働的であると学びが促進され (Storch, 2002)、また、meaning-focused task であるとランゲージングが起りやすい (Storch and Alshuraidah, 2020) との報告がある。ZPD における足場かけは、教師から学習者に対して行われるものを議論することが多かったが、協働対話においては、学習者同士の「協働的足場かけ」が問われることになる。本研究は、協働対話型ランゲージングを英語劇活動に取り入れた際の LREs (Language-related Episodes) を取り出し、内容を分析する。ここでの協働対話型ランゲージングは、オリジナルの英語劇原稿の修正を目的とするタスク活動である。参加者は高専 1 年生 (高校 1 年生に相当) であり、グループで自分たちの原稿を修正した。分析は原稿修正する際にグループで行われた対話を録音し、文字起こしを行った後のテキストを対象とした。対話の内容を分析したところ、学習者は最終的に自分たちが作成した原稿に基づいて、英語劇を演じることが求められるため、原稿修正については、英文の誤りだけではなく、登場人物像やストーリー展開に応じた表現や、聞いている人に伝わりやすい表現を模索する対話が行われたことがわかった。対話の内容と活動直後のアンケートから、学習者がどのように「協働的足場かけ」を行っているのかを示すことが、本研究の目的である。ランゲージング研究は知識構築の「正確性」を分析する場合が多いが、本研究では英文の正確性というよりも、「伝わりやすい英語」についての知識がやりとりによってどのように構築されるのかに注目するところに特徴がある。英文の正解を探求するのではなく、状況に応じて、文脈を考慮するという意味において、母語の思考力や理解が、英語の運用にどのように活用されるかを問うものである。

自由研究発表 第5室 ⑥ (13:30～14:00)

大学英語系学科ゼミ生の学習状況の分析と課題—正統的周辺参加論を枠組みとして

【SNS 発信不可】

千田 誠二 (大妻女子大学)

本研究は、大学英語系学科のゼミ活動にみる学生の学習状況について、Lave & Wenger(1991)が提唱した「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) 」(以下、LPP)を枠組みとして分析したものである。とりわけゼミ学習活動での集団への個々の学生の関わり方に注目した。分析のデータ収集にあたっては、観察メモを取り、それらのデータをもとに数人の学生にインタビューを実施して、当人のゼミ活動を通しての気づきを語ってもらうこととした。

国内の英語系ゼミの実践事例では、英語力育成、とりわけ一定の創造性を伴う英語使用を目的としたゼミの実

実践活動報告が複数ある。課題解決型学習の実践（丹治他、2014）、ゼミ内英語多読活動の実践（竹森、2015）、マルチリンガル教育の一環としての英語で開講するゼミ活動（湯川、2016）、英語ドラマ制作ゼミ（仁科、2019）などのように、ゼミ学習活動の形態の工夫とその教育効果を報告したものが興味深い。

一方で、英文学科という「英語環境」に属している学習者である大学生が、「個」の立場として、自身を取り巻くゼミ集団や活動にいかにかommitしつつ、英文学科生としてのアイデンティティ形成をしながら、どのようにして学習していったのか、という質的な面での調査をした研究は少ない。

本研究では、ゼミ活動をあらゆる要素が重なりあって成立したコミュニティと捉える。多様で階層的な考慮すべき状況、例えば私立・国立等の区分の違い、教員養成を目的としたゼミか否か、大学の建物や立地がもたらす影響、女子大学とジェンダーという視点、レベル別・習熟度別クラスに基づくカリキュラムやゼミ選択などの制度、潜在的に培われる大学文化、など多様な視点を予見しつつゼミ活動における学生の参加・学習状況を捉える。

大学入試改革が進み、英語教育の方向性が揺らぎ論議されている中での英語系ゼミ活動のLPP分析によって、一般の教室内言語活動を改善する枠組みの供与にもつなげたい。

自由研究発表 第5室 ⑦ （14:10～14:40）

批判的思考力を高める活動を中心とした英語授業が生徒に与える影響

山本 裕也（麹町学園女子中学校高等学校）

本研究発表は、高校3年生（2クラス）を対象とした「コミュニケーション英語Ⅲ」における批判的思考力を高める授業の実践報告である。米国国務省が主催し、アメリカの大学が提供する2ヶ月間に渡るオンライン英語教員研修での学びを基に、授業を計画・実践した。

2022年度より年次進行で実施される高等学校の新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が学校現場で求められ、英語の授業を通して生徒の思考力を高める必要性が述べられている。しかし、発表者は、生徒たちの批判的思考力を高める指導が十分でないという課題意識があった。そこで、約二ヶ月間に渡り「Integrating Critical Thinking Skills into the Exploration of Culture in an EFL Setting」という研修を受け、生徒の批判的思考力を高める授業を実践した。題材は、検定教科書 My Way Ⅲの“Digital Books vs. Printed Books”を使用した。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、1コマが40分授業であったため、2時間分の授業を使って実践を行った。

本実践では、批判的思考力の要素である「違った立場での前提を調べる」と「違った角度で別の可能性を想像する」に焦点を当て、Digital books と printed books のどちらの媒体が、さまざまな立場の人たちにとってより好んで使われるか、級友と協力しながら考えさせた。具体的な手段として本文を扱ったあとに、「老人」や「日本に住んでいる外国人」など6つのグループに分け、違った立場の人がどちらの媒体をより好むか、理由を含めてグループで考えさせた。そして、違うグループの級友と再度グループを組み、それぞれの立場で理由を含めて発表を行った。

実践後、生徒たちがどのように課題に取り組み、どう感じたか明らかにするために、Microsoft Forms を用いて質問紙調査を実施した。その結果、「級友と意見を共有することで、柔軟な考え方ができた」など好意的な意見が大部分を占めた。本実践報告を通して、批判的思考力を高める授業の有用性と課題について考察する。

自由研究発表 第1室 ⑨ (15:40～16:10)

実践共有コミュニティに関する調査から読み取れる英語教育の現状とニーズ

【SNS 発信不可】

永倉 由里 (常葉大学)

藤田 卓郎 (福井工業高等専門学校)

南 侑樹 (神戸市立工業高等専門学校)

高木・田中(2021)は、授業研究について「学びの共同体」「専門職の学習共同体」それぞれの観点から考察している。前者は、参観し合う授業が年間数十回にも及び、教員の負担が大きく、強力なスーパーバイザーの教示により取り仕切られる傾向があるため、協同的な省察が不十分で、教師の専門性の向上が担保されないと指摘している。一方、後者は、広く行われてきた授業研究の形式だが、職務として参加し、管理職や大学教員等による助言で締めくくられることが多く、参加者の消極的態度と形式的開催につながっているとしている。

上記の議論を踏まえ、両氏は、非公式な場における自発的な参加と対等な立場での学習・研修が展開する「実践共同体(Community of Practice: CoP)(Lave & Wenger, 1991)」の可能性を示唆している。教師同士による「授業のねらい」「授業の内容・方法」「学習者の表れ」等の共有こそが、各自の文脈の理解と改善につながり得るとしている。

急激な社会変容を受け止め、新学習指導要領の具現化やICT活用を推し進めていくには、「実践共同体」において、従来の教育観・学習観を見直す必要があるが、英語教育において実践共同体についての実態を調査した事例はなく、現存する実践共同体がどのような機能を有しているか、またどのような課題を抱えているかが精査されていない。

そこで、発表者らは、英語教員らが参加する「実践共同体」またはそれに類するコミュニティ16団体を対象に、現状の把握を目的とした質問紙調査及びインタビューを行った。質問紙の回答は数量化され、自由記述は発表者3名でコーディングを行い、キーワードを抽出した。またインタビューから実践共同体の発足の背景、活動の目的・内容、課題等に関する回答を得た。その量的・質的分析結果から、実践共同体が教師らの成長と授業改善に貢献している実態を報告する。

自由研究発表 第1室 ⑩ (16:20～16:50)

英語専攻の日本人大学生にとっての理想の英語教師

【SNS 発信不可】

藤田 賢 (愛知学院大学)

グローバル化が急速に進み、情報通信技術が発展し、知識基盤社会や少子高齢化社会を迎えている。このような社会の大きな変化の中で、次世代を生きる子どもたちの教育の在り方が模索されてきている。例えば、新しい学習指導要領は、2020年度より小学校で実施されており、2021年度には中学校でも全面実施されている。ま

た、高等学校では、2022年度より年次順に実施される予定である。子どもたちの教育では、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等という3つの資質能力の育成が目標とされている。同時に、学校に期待される役割や教師に求められる資質能力についても、その具体が整理され、チームとしての学校の構築や教員養成の改革が施策化されてきている。

本論文では、このような時代の中で必要とされる英語教師としての資質能力の実態を明らかにすることを目的とした。まず、教員の資質能力をめぐる状況について、文部科学省による一連の提言を振り返った。次に、大学生や中高生を対象として理想の教師像の調査を行った先行研究を概観した。次いで、大学生や高校生を対象とした理想の英語教師像の先行研究の成果と今後の課題について整理した。その上で、本研究では、英語専攻の日本人大学生の英語学習者を参加者として、理想の英語教師像に関するアンケート調査を実施した。その結果、英語習熟度別に見た理想の英語教師像としては、上位クラスでも下位クラスでも学習者を受け止め、学習状況に応じた指導ができることが大切であり、さらに、上位クラスにおいては、英語が堪能であり、学習者と交流しながら、コミュニケーション力をつけさせることなど授業の多様な工夫ができることも理想の教師には必要だということが明らかになった。

自由研究発表 第1室 ⑪ (17:00～17:30)

教科としての英語の「評価」における小学校教員の意識調査

田村 岳充 (宇都宮大学教育学研究科専門職学位課程教育実践高度化専攻)

本研究は、2020年度に小学校に導入された教科としての英語について、特に「評価」に対する小学校教員の意識を調査し、今後の小学校教員への支援に生かすことを目的としている。

小学校新学習指導要領の全面実施元年にあたる2020年の12月に、A県内の2市、1町の小学校16校の教員(調査参加者96名)を対象として、英語における「評価」についてどのように捉えているか、各々の意識について問う質問紙調査を実施した。質問紙は、①3観点(知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度)の評価をどのように行っているか、また、評価をする際の困り感や悩み等を尋ねる質問、②3観点相互の関連や相違点についての困り感や悩み等を尋ねる質問、③2020年3月に国立教育政策研究所(以下国研)が発表した「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料小学校外国語・外国語活動編」に示された評価規準の例を、話すこと【やり取り】と【発表】について一つずつ示し、その分かりやすさや活用のしやすさ等について尋ねる質問の3つで構成されている。

回答を集計、分析した結果、学校や学年によって3観点の評価をするために採用した方法にはばらつきがあり、教科としての英語授業を実施した初年度であることの影響を受けてか、小学校教員が試行錯誤をしながら評価を行っている状況が浮かび上がった。また、知識・技能と思考・判断・表現の相違やそれぞれについて求められる適切な見取りの方法を模索している様子も明らかになった。また、国研が例示した評価規準について、特に話すこと【やり取り】について、例示された内容の理解が難解に感じられたり、適切な評価を行うために、より多くの解説や児童の会話例等を求める要望が寄せられたりした。これらの結果を基に、英語の評価における小学校教員への支援のあり方について考察したことを発表する(本研究はJSPS科研費JP19K00785の助成を受けたものです)。

自由研究発表 第2室 ⑨ (15:40～16:10)

世界のお米を知ろう！“Rice de Nice”—小・中学校における英語の音声・文字指導の ICT 教材開発の取組み

伊藤 由紀子 (大阪成蹊大学)

英語の文字を理解し習得することは容易ではないが、音声指導から文字指導へ移行していく小中連携時期に、児童・生徒らがつまづいてしまうという課題が見られる。本研究の目的はそのような児童・生徒を一人でも減らすため、音声から文字へのステップとなるような ICT 教材を開発することである。現場で求められている教材の形態について、小中学校の教員 46 名にアンケート調査を実施した。その結果、「ゲーム形式で音を聞いて文字を選んだり文字を押すと音が出たりするような、楽しいタブレット教材」が求められていることがわかった。加えて、新型コロナ禍でオンライン授業に対応できる教材も必要であると考え、そこで本研究では、社会科、家庭科と英語を関連させた CLIL (内容言語統合型学習) をベースに、「お米」をテーマに取り上げたパワーポイント絵本を作成することにした。教室で現場の教員が普段からよく使用しているソフトを用いることを想定し、児童・生徒が世界で栽培されているお米の種類や、それぞれに合った調理方法についてのストーリーを聞いて理解し、お話の中に出てきた語のライミングやアリタレーション、音節などのクイズを通して音声や文字が学べる“Rice de Nice”という ICT 教材を開発した。さらに、本教材に合わせた内容と文字を扱ったワークシートも作成し、2020 年の二学期に大阪府の公立小・中学校で実践した。実践は小学校 4 年生、6 年生を対象に、中学校では試験的に希望者に行った。文部科学省が打ち出した GIGA スクール構想によって一人一台のタブレット端末が配布されたこともあり、授業の中で個人が繰り返し教材を使用することが可能であった。実施後に、使用した教員らにインタビューを実施した結果、児童・生徒が音と文字のルールに気付いたり、お米の種類や調理法に興味を持ったりする姿が見られたことがわかった。

自由研究発表 第2室 ⑩ (16:20～16:50)

CLIL で繋ぐ小学校外国語教育と防災教育の統合実践

常名 剛司 (静岡大学教育学部附属浜松小学校)

2018 年より、小学校外国語教育の専門家と防災教育を専門家とで防災を扱った小学校外国語教育の統合実践を積み重ねてきた。外国語を使った PBL の学習過程で、他教科・領域などの新しい学習内容と外国語のスキルを同時に身に付ける Content and Language Integrated Learning(以下 CLIL)授業には、これからの小学校外国語教育への導入に期待が寄せられている。また、南海トラフ巨大地震の脅威に晒されている静岡県にとっては、防災教育の充実が急務である。本実践報告では、小学校外国語教育と防災教育を統合して学ぶ過程について整理し、児童の表れ、振り返りの記述などを分析して、今後の教材開発や授業改善のポイントについて検討する。

自由研究発表 第2室 ⑪ (17:00～17:30)

医療専門職に焦点を当てた ESP 教材の研究

【SNS 発信不可】

小澤 淑子 (鈴鹿医療科学大学)

特殊な目的のための英語 (ESP) 教育の効果が検証され、医療専門職者の養成課程の英語教育での使用を目的とした病院での会話、解剖学、生理学を取り入れた教材が開発されてきた(Dudley-Evans & ST John, 1998; Master, 2005; Kozawa, 2009)。さらに、今日では、専門性の高い種々の医療職者連携の必要性から他職種理解のための教材も開発されている (Kozawa, Y. & H. Takagi, 2015)。そこで、その種の教材の効果を検証した。その結果、そうした教材で学習後、学生は英語の語彙、慣用句、文構造および特定の医療専門職についての知識向上を認識し、学習活動が学習に役立つと理解すれば難度や好みに関わらずその活動を高評価し、教材の内容理解は、内容理解の問の理解と有意に高い相関を示した一方、語彙、慣用句、文構造の知識とはほとんど相関がなかった。これらの結果から、学生のクラス活動の重要性の理解が取り組みに影響し、非日常的な専門用語も内容理解の障害とならないため、さらに高度な専門用語の導入を避ける必要はなく、内容理解のための質問と答えのある教材で効果的に医療専門職に関する ESP 教材の内容を学習することができるという結論に達した。

自由研究発表 第3室 ⑨ (15:40～16:10)

CEFR-J Word List B1, B2 レベル掲載語彙の意味領域による分析

南部 匡彦 (国際短期大学)

英語学習で4技能の活動をする際にいずれの技能においても中心となるのは語彙知識であるが(Schmitt, 2000; Nation, 2005)、語彙習得はどれくらい多くの語彙を知っているかという語彙知識のサイズ(breath)だけでなく、ある語彙に対して、どれだけのことを知っているかという語彙知識の深さ(depth)の重要性も主張されており(Nation, 2013 他)、学習者の習熟度の向上に応じて学習語彙が属する意味領域の複層性を考慮した語彙指導が必要となる。

本研究では一定の英語熟達度に到達している大学英語学習者を念頭におき、CEFR-J に準拠する語彙表としてのCEFR-J Wordlist(以下 CJWL と略記)のB1 および B2 レベル(それぞれ総語数 2,445 語と 2,779 語)を分析対象語彙とし、単語の「意味領域」という定性的な観点から、CJWL の語彙配列の特徴を明らかにした。CJWL の意味領域の分析には、語彙の分類基準となる同義語・類義語を分類・整理し、品詞毎の意味領域で語彙を分類してリスト化した The UCREL Semantic Analysis System(Rayson et al., 2004)の21分野で構成される意味領域構造を利用して、B1 と B2 レベルに出現する語彙の意味領域の構成比を調査した。

語彙配列の全体の傾向としては、意味領域が多数(3～9 領域)にまたがる語彙の総数は限られており(B1: 24.62%, B2: 19.72%)、大多数の語彙が単一の意味領域もしくは2領域のみにまたがる語彙であることが明らかになった。本発表では、A1, A2 レベルの語彙配列の意味領域の特徴との比較にも言及しながら、小・中・高・大の一貫した語彙学習の視点で CJWL の語彙リスト全体の特性とその有用性に関して考察を加える。

自由研究発表 第3室 ⑩ (16:20～16:50)

nursery rhymes の使用に関する一考察—発音への気づきを促す Google 翻訳アプリを活用して

【SNS 発信不可】

田中 裕実 (静岡大学 (非))

本発表では、保育学部1年次の必修教養科目「英語コミュニケーション」の一部を使って、保育英語に関連する nursery rhymes を用いた活動を行った事例報告を行う。授業者は、PC やスマートフォンを用いて英語モデルを提示し、学習者はスマートフォンを用いてその英語モデルを視聴し、そのモデルを参考にして個人やグループで発音練習を重ね、最終的には学習者が英語モデルなどを見ずに、手真似などの振り付けを加えながら、人前でプレゼンテーションを行えるように指導を行うという流れである。また、振り返り際には自己評価の一環として、Google 翻訳アプリ(Google Translate, 以下 GT)の音声入力機能を用い、自らの英語の発音発話を客観的

に確認してもらつ時間を設けて、実際に通じる発音となっているか否かのチェック機能を取り入れたり、GT のその指摘を活用して発音の修正を試みたりするなどの工夫を取り入れた。この手法により、学習者が意味を理解し、グループワークを重ねて楽しみながら nursery rhymes をプレゼンテーション出来るようになるだけでなく、GT による通じるか否かの確認があることで、学習者が、自らの発音に対する気づきが生まれたり、一連の発表内容をより英語らしく伝えるためにどうすればよいかを考えるきっかけを与えたりすることに繋がった。当該英語授業内において用いられた学習の過程や、学習者個人の振り返り、アンケート結果などを紹介し、学習者の様子、発表内容やモチベーションなどにどのような変化が表れたかを報告する。

自由研究発表 第3室 ⑪ (17 : 00 ~ 17 : 30)

Interactive Use of the Target Language and Its Effect on Learners' Understanding of New Words

【SNS 発信不可】

Yamamura Hiroto (富山高等専門学校)

Teachers' use of the target language in the Japanese classrooms has been investigated from different perspectives over the past decade. Some studies investigated how much English was used and for what purposes by the teachers by conducting surveys or analysing recorded classroom discourse, while other studies measured teachers' and/or learners' perceptions towards lessons in English. This study argues that in order to make the most of English lessons conducted in English, attention also has to be paid to how teachers talk in the target language when teaching new language elements in relation to learners' understanding of them.

The aim of the present study is to explore the extent to which the way the teacher talks in the target language contributes to students' understanding of new words. Thus, the study examines the quality of teacher talk as a means for teaching English per se, going beyond prefabricated classroom English used for classroom management such as giving instructions and praising students. In teaching new words in the target language, the author tried to incorporate three essential elements of quality teacher talk: eliciting, illustrating meanings in contexts and checking understanding in English with the aim of maximising students' leaning. Forty-three students in the second grade of high school level participated in the study, where the author taught nine content words in English, followed by an online questionnaire to see whether the students understood the meanings of the words as well as to assess their perceptions towards the teaching.

自由研究発表 第4室 ⑨ (15:40～16:10)

小学校外国語科における「読むこと」「書くこと」の「思考力・判断力・表現力等」の指導と評価—デジタル教科書教材を活用して

高橋 美由紀 (鈴鹿大学) ・柳 善和 (名古屋学院大学)

本発表では、小学校外国語科のデジタル教科書を活用して「読むこと・書くこと」における「思考力・判断力・表現力」を育成することを目的とした指導と評価について、具体例を提示・検討する。また併せて、デジタル教科書を実際に活用して授業を行う教師側の意見から、指導と評価の一体化について提案する。

学習指導要領の改訂に伴い、小学校外国語教育では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう人間性等」の3観点からの指導と評価が求められる。そして、「読むこと」「書くこと」の「思考力・判断力・表現力等」については、「身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすること」と明記されている(文部科学省2017:159)。はじめに、文部科学省(2017)『小学校外国語活動・外国語の研修ガイドブック』に基づいて、「読むこと、書くこと」の活動とその効果を述べる。次に、実際のデジタル教科書 Here We Go! (光村図書)を活用して、「読むこと、書くこと」の具体例を提示・検討する。具体的には、コミュニケーションの場面の画像を活用して「読むこと」「書くこと」の活動へつなぐことを試みる。なお、「読むこと」「書くこと」の評価例は、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』(文部科学省2020)に掲載されている「思考力・判断力・表現力等」(pp.77-86)を参考にしている。そして、指導と評価の一体化として、デジタル教科書を活用して、(1)読むこと=関わる語句や表現を識別し、推測して読むことや、(2)書くこと=相手に伝わるように、自分の考えや気持ちなどを書く活動について等を評価する実際の内容と評価を提案する。最後に、デジタル教科書を活用する教師側の意見から、指導と評価の一体化の課題について論じる。

自由研究発表 第4室 ⑩ (16:20～16:50)

The Minimal English Test 60 (MET 60) for Chinese Learners of English: A Study in Sichuan and Shaanxi Provinces of China

Qiu, Xiao-Shi (大阪大学大学院) & Maki Hideki (岐阜大学)

Maki et al. (2003) developed the original version of the Minimal English Test (MET), a five-minute English test, which requires the test taker to write a correct English word with four letters or fewer into each of the 72 blank spaces of the given sentences, while listening to a corresponding CD. Since then, the Maki Group has found statistically significant correlations between the scores on the

MET and the scores on the English section of the National Center Test for University Admissions in Japan administered by the National Center for University Entrance Examinations. See Maki (2018) for the details of the MET.

In the previous studies by the Maki Group, research had never taken the categories of the target words in the MET into account. Instead, they randomly picked up target words by choosing every X-th word in the MET. In this paper, we used the new version of the MET created by Hideki Maki in January of 2019, and investigated whether the new version of the MET could measure the English proficiency of Chinese learners of English measured by the College English Test (CET) widely used in China, and which categories could contribute to the scores on the MET. The new version of the MET is called the MET 60, as it contains 60 target words, and consists of five syntactic categories (articles, nouns, prepositions, pronouns and verbs), each of which contains 12 target words.

The MET 60 was administered at two universities in Sichuan and Shaanxi Provinces of China in March of 2019. A total of 120 college students participated in this study. The average age of the 120 participants was 19.56. None of the participants were familiar with the MET 60 we used in this study.

Through a series of analysis, we found (i) that there was a strong correlation between the scores on the MET 60 and the scores on the CET Band 4 (the CET-4 for short), and (ii) that there was no difference among the five syntactic categories in terms of the predictability of the scores on the CET-4.

自由研究発表 第4室 ⑪ (17:00 ~ 17:30)

小学校英語教育に関する科学的根拠生成のためのアウトカム指標の検討 — 「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てて

酒井 英樹 (信州大学)

因果関係を示す科学的根拠に基づく教育政策が注目を浴びるようになっている。本研究は、小学校英語教育に関する教育政策的判断を可能とするエビデンス生成のために、小学校外国語活動・外国語科が育成すべき資質・能力の一つである「学びに向かう力、人間性等」（評価の観点としては「主体的に学習に取り組む態度」）に焦点を当てて、アウトカムとしての測定変数は目標と適合しているかという観点と、介入の効果を適切に反映する指標かという観点から、小学生を対象に調査を行った研究を選び文献研究を行った。分析の結果、主たる構成概念として、WTC、国際的志向性、学習意欲、不安、主体性、好感などが挙げられた。それぞれ、資質・能力と構成概念の整理を行うと同時に、群間比較もしくは時間変容の結果に基づきアウトカム指標としての適切さを検討した。

中部地区英語教育学会 役員

会長	酒井 英樹	信州大学
副会長（運営担当）	田中 武夫	山梨大学
副会長（研究担当）	古家 貴雄	山梨大学
運営委員長	滝沢 雄一	金沢大学
紀要編集委員長	島田 勝正	桃山学院大学
紀要編集事務局長	佐久 正秀	大阪信愛学院短期大学
会計委員	和田 順一	松本大学
顧問	青木 昭六	兵庫教育大学名誉教授
	諏訪部 真	元静岡大学
	渡邊 時夫	信州大学名誉教授
	大下 邦幸	福井大学名誉教授
	杉浦 正好	愛知学院大学
	早瀬 光秋	三重大学名誉教授
運営委員		
愛知地区	犬塚 章夫	刈谷市立亀城小学校
	藤原 康弘	名城大学
	松村 昌紀	名城大学
石川地区	滝沢 雄一	金沢大学
	階戸 陽太	金沢学院大学
	山岸 律子	白山市立美川中学校
岐阜地区	柳 善和	名古屋学院大学
	巽 徹	岐阜大学
	加納 幹雄	岐阜聖徳学園大学
近畿地区	島田 勝正	桃山学院大学
	佐久 正秀	大阪信愛学院短期大学
静岡地区	永倉 由里	常葉大学
	内田 恵	静岡大学
	巨理 陽一	中京大学
富山地区	岡崎 浩幸	富山大学
	清水 義彦	富山県立大学
長野地区	和田 順一	松本大学
	赤瀬 正樹	長野工業高等専門学校
	駒井 健吾	長野県立須坂高等学校
奈良地区	佐藤臨太郎	奈良教育大学
	柏木質津子	大阪教育大学
福井地区	伊達 正起	福井大学
	吉田 三郎	敦賀市立看護大学
	森 一生	福井県立武生高等学校定時制
三重地区	藤田 賢	愛知学院大学
	城野 博志	名古屋学院大学
	川村 一代	皇學館大学
山梨地区	古家 貴雄	山梨大学
	田中 武夫	山梨大学
	堀田 誠	山梨大学
和歌山地区	松尾 眞志	市立和歌山高等学校
	尾上 利美	和歌山大学
他の地区	大場 浩正	上越教育大学
	浦野 研	北海学園大学
会計監査	前田 昌寛	金沢星稜大学
	室井美稚子	清泉女学院大学

中部地区英語教育学会第 50 回記念愛知大会（CELES2021）実行委員

委員長	犬塚 章夫	刈谷市立亀城小学校
副委員長	松村 昌紀	名城大学
事務局長	藤原 康弘	名城大学
事務局員	小嶋 ますみ	岐阜市立女子短期大学
	山口 篤美	名城大学
実行委員	安達 理恵	椚山女学園大学
	石川 純子	名古屋大学
	今井 隆夫	南山大学
	加藤 拓由	岐阜聖徳学園大学
	工藤 泰三	名古屋学院大学
	児玉 恵太	名城大学
	小林 真実	中京大学
	Jarrell, Douglas	名古屋女子大学
	寺井 雅人	名古屋大学大学院
	松井 孝彦	愛知教育大学
	松井 千代	愛知淑徳大学
	三上 綾介	名古屋大学大学院
	村尾 玲美	名古屋大学
	山本 純一	刈谷市立刈谷南中学校



中部地区英語教育学会第 50 回記念愛知大会

新課程対応 中学英語ワークブック

『めきめき English』

『Smile English』



「使う場面」に合わせて自由に表現できる！

文法のイメージを一目で理解できるイラスト付き

ワークブック付属 別冊単語

『英単 GO!』

- ・ オンセット・ライムで単語の発音練習ができる特集
- ・ QR で単語の発音を確認



信頼をつちかい 学びで未来をひらく

浜島書店